ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告43

富山市舘本郷（たちほんごう）Ⅱ遺跡
発掘調査報告書

―経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備）高善寺地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)―

２０１１

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告43

富山市舘本郷（たちほんごう）Ⅱ遺跡
発掘調査報告書

―経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）高善寺地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（1）―

２０１１

富山市教育委員会

調査区遠景（北東から）

調査区遠景（南西から）

A区完掘（南から）

B区完掘（南から）

例　　言

1　本書は、富山市八尾町高善寺(こうぜんじ)地内に所在する舘本郷Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、経営体育成基盤整備事業(県営ほ場整備)高善寺地区に伴うもので、富山県富山農林振興センターから委託を受け、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した。

　調査費用は「農業基盤整備事業などにかかる農林省と文化庁の覚書」第5項に基づき、農家負担分について、富山市が文化庁所管の国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。

3　現地調査期間、出土品整理期間、調査面積（㎡）、調査担当者は次のとおりである。

　調査期間　　現地調査　　平成22年8月11日～平成22年9月30日

　　出土品整理　平成22年10月1日～平成23年3月18日

　調査面積　　331.9㎡

　調査担当者　富山市教育委員会埋蔵文化財センター　主査学芸員　細辻嘉門・嘱託　蓮沼優介・嘱託　三上智丈

4　調査にあたり、高善寺地区区長をはじめ、井田川沿岸土地改良区及び地元高善寺地区のご協力を得た。記して謝意を表します。

5　自然科学分析は、株式会社吉田生物研究所に委託し、その成果は本書「第Ⅳ章　自然科学分析」に掲載した。

6　出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。

7　本書の執筆・編集は、蓮沼、三上の協力を得て細辻が行った。

凡　　例

1　本書で用いた座標は国土座標Ⅶ系に準拠した。方位は真北、水平基準は海抜である。

2　土層説明、遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖　1995年版』に拠る。

3　遺構記号は、溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、ピット：ＳＰ、その他の遺構：ＳＸを用いた。

4　図中の網掛は、以下のとおりである。

　地山　　煤　　青磁の断面　　須恵器・珠洲の断面

目　　次

第Ⅰ章 調査の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1～2
第1節 調査にいたる経過
第2節 発掘調査及び整理等作業の経過
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2～3
第1節 地理的環境
第2節 歴史的環境
第Ⅲ章 調査の方法と成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8～13
第1節 調査の方法
第2節 基本層序
第3節 遺構
第4節 遺物
第Ⅳ章 自然化学分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15～18
第Ⅴ章 総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19～20
引用・参考文献 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
報告書抄録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

挿 図 目 次

図1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
図2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
図3・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
図4・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
図5・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
図6・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
図7・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
図8・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
図9・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23～24
図10・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
図11・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
図12・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
図13・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
図14・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

表 目 次

表1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
表2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
表3・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
表4・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
表5・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
表6・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
表7・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

写真図版目次

図版1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
図版2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
図版3・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
図版4・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
図版5・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査にいたる経過

舘本郷Ⅱ遺跡（1）は、平成11年度に八尾町教育委員会（当時）が実施した分布調査で翠尾Ⅰ遺跡から独立して新規設定され、遺跡№.361068として登載された。

平成18年6月、富山県富山農地林務事務所（当時：現富山県富山農林振興センター）による八尾町高善寺地内の県営ほ場整備事業について協議があり、事業地40.2ｈａの一部が舘本郷Ⅱ遺跡に含まれるため、平成19年～21年の3年間にわたって試掘調査を実施することとなった。

初年度の平成19年度は、経営体育成基盤整備事業高善寺地区が事業採択されたこともあり、細部協議の結果高善寺地区と上高善寺地区にわたる61,861㎡を対象として試掘調査を実施した。その結果、国道472号線の東側53,111㎡では遺跡の所在は確認されなかった。国道の西側8,750㎡では古代の溝・土坑などを検出し、土師器・須恵器・中世土師器・青磁・瀬戸美濃などが出土した。遺跡の所在範囲は7,350㎡である。

平成20年度は、高善寺地内の6,790㎡を対象として試掘調査を実施した。その結果、弥生時代の土器溜まり・溝、古代の溝・ピットなどが検出され、弥生土器、土師器・須恵器、珠洲・中世土師器、近世陶磁器などが出土した。遺跡の所在範囲は750㎡である。

また、上層に中世の遺物包含層、下層に古代の遺物包含層を確認した910㎡については結論を保留し、翌年度に隣接地で追加の試掘調査を行って、その結果を加味して遺跡の所在範囲を確定することとなった。

平成21年度は、高善寺地内の8,400㎡を対象として試掘調査を実施した。その結果、古代の溝・土坑・ピット、中世の溝・土坑を検出し、土師器・須恵器・珠洲・近代陶磁器が出土した。遺跡の所在範囲は3,160㎡である。

なお、20年度試掘調査で結論を保留した部分については、一部で上層に中世、下層に古代の遺跡の所在を確認した。このため、遺跡所在範囲は1,680㎡、延べ遺跡所在範囲は2,730㎡に確定することとなった。

3年間の試掘調査の結果、最終的に合計13,240㎡に遺跡の所在が確認された。

また、試掘調査により遺跡が当初八尾町教育委員会の設定した遺跡範囲より西側に広がることが確認されたため、遺跡地図の範囲拡大の変更手続きを行った。このことにより埋蔵文化財包蔵地の面積は227,250㎡となった。

遺跡の所在が確認されたことから、協議によって水田部分は一部を除き田面調整によって盛土保存されることとなった。用排水部分2ヶ所331.9㎡については工事による遺構面の破壊が避けられないことから、発掘調査を行うこととなった。

協議に基づき、平成22年7月8日、富山県と富山市の間で埋蔵文化財発掘調査委託業務契約を締結した。履行期限は平成23年3月18日である。

文化財保護法94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知は、富山県富山農林振興センターから平成22年8月9日付け富振第719号で富山市教育委員会へ提出され、富山市教育委員会の副申を付けて同日付け埋文第102号で富山県教育委員会へ提出した。

文化財保護法99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告は、平成22年8月31日付け埋文第102号により提出した。

第2節　発掘調査及び整理等作業の経過

発掘調査は平成22年8月11日から表土掘削作業を開始した。表土掘削作業完了後8月18日から人力による包含層掘削をB区から開始した。包含層掘削完了後、遺構検出作業・遺構掘削作業を進めた。掘削作業と並行して随時写真撮影・トータルステーションを用いた測量・図面作成作業を行った。9月29日にはラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、現地調査は9月30日に完了した。

遺物整理・報告書作成作業は現地調査終了後埋蔵文化財センターで実施した。作業内容は遺物洗浄・注記・接合・復元・実測・トレースの他、報告書原稿執筆・図版原稿作成・遺物写真撮影である。

平成23年3月18日に本書を刊行して完了した。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境

舘本郷Ⅱ遺跡の立地する富山平野は富山県中央部に位置する。北は富山湾、東端は早月川扇状地、西端は呉羽山丘陵に接し、南端は飛騨山地から続く丘陵に面する。富山平野の地形は全体に南から北へ向かって緩やかに傾斜しており、神通川とその支流が形成した扇状地の発達が顕著である。

遺跡は、富山湾から南に18㎞内陸に入った富山平野南部、神通川支流井田川左岸の扇状地上、富山市八尾町高善寺地内に所在する。東西約400m、南北約600mの範囲に広がる。

今回の調査地は遺跡の南端～ほぼ中央に位置し、調査地周辺の標高は42m前後である。

第2節　歴史的環境

舘本郷Ⅱ遺跡では、平成8年度に遺跡の北端で個人住宅増築に先立つ発掘調査が実施され、下層から弥生時代終末期の土器溜まり3ヶ所・掘立柱建物1棟・土坑1基・ピット多数が検出され、土器溜まりから祭式土器が大量に出土した。集落の境界において恒常的に祭祀を行っていた痕跡ではないかと推測されている。上層からは古代（8世紀前半～10世紀前半）の掘立柱建物3棟・柵状遺構1・溝及び土坑が多数検出され、集落の東南隅の一画に相当すると推測されている。〔八尾町教育委員会1997a〕。

周辺の遺跡としては、翠尾Ⅰ・南部Ⅰ遺跡(2)がある。本遺跡の北方、井田川左岸の扇状地上に帯状に広がる弥生時代ー近世の複合遺跡である。数次にわたる発掘調査で、弥生時代終末～古墳時代前期、奈良・平安、中世、近世の集落跡が確認されている。

翠尾Ⅰ・南部Ⅰ遺跡の範囲内に所在する田中館跡(3)は、本遺跡の北1㎞にある西円寺周辺に広がる城館跡である。田中保を領有した豪族田中市正又四郎が、婦中町熊野道から移住して構えた居館跡として伝えられている。市正が田中保を領有した時期は不明であるが、その後舘本郷に移り、明応2年(1493)か3年(1494)ごろに越後上杉氏との争いで戦死したと伝わる。

ほ場整備に先立つ発掘調査では12世紀後半～15世紀の掘立柱建物・井戸・溝・土坑を確認し、珠洲・中世土師器・青磁・瓦質土器・漆器などが出土しており、田中氏居館の一部と考えられている。

また、遺跡周辺では特に呉羽山丘陵南端部において、弥生時代から中世にかけて多くの遺跡が集中することが明らかになってきている。

山田川右岸標高120mの富崎丘陵頂部には富崎赤坂・離山砦遺跡(4)がある。弥生時代後期後半の土器廃棄遺構や竪穴建物等が確認され、立地から高地性集落と考えられる。

山田川左岸独立丘陵上に立地する千坊山遺跡(5)は、平成6年度から平成9年度にかけて試掘調

査を実施し、弥生時代後期後半から終末期の竪穴建物24棟が検出された。このことから、当該期における県内最大級の集落遺跡であるとされた。

千坊山遺跡の西400mの丘陵上にある六治古塚墳墓(6)は、平成11年度の試掘調査で、一辺24.5m、高さ5.1mで周溝を持つ四隅突出型墳丘墓であることが確認されている。

千坊山遺跡の西300mにある向野塚墳墓(7)は全長25.2mで周溝を持つ前方後方型墳丘墓であることが確認されている。両墳墓とも、千坊山遺跡の墓域ではないかと推測されている。〔婦中町教育委員会2002〕

鍛冶町遺跡(8)では、平成12～13年度の発掘調査で、弥生時代後期後半から古墳時代前期の竪穴建物3棟・溝・土坑・土器廃棄遺構などが検出され、弥生土器、土師器などの遺物が大量に出土した〔婦中町教育委員会2003〕。

鍛冶町遺跡の西300mの丘陵上には鏡坂墳墓群(9)がある。平成12年度に試掘調査を行い、1号墓は一辺24.1m・高さ4.8m、2号墓は一辺13.7m・高さ3mの大小2基からなる弥生時代終末期の四隅突出型墳丘墓であることが確認された。立地から鍛冶町遺跡の墓域と推測されている。〔婦中町教育委員会2002〕

富崎丘陵下の山田川右岸扇状地上には富崎遺跡(10)があり、弥生時代終末の竪穴建物や土坑などを確認し、弥生時代後期後半～終末期の土器が出土している〔富山市教育委員会2008a・b〕。

富崎遺跡の北西700mの丘陵上にある富崎墳墓群(11)は、平成12年度に試掘調査を行い、1号墓は一辺21.7m・高さ3m、2号墓は一辺17m以上・高さ2.8m、3号墓は東西21m・南北22m・高さ3.9mの四隅突出型墳丘墓3基で構成されることが確認された。遺物は3号墓から弥生時代後期後半の土器が大量に出土した。〔婦中町教育委員会2002〕

古墳時代の遺跡としては、勅使塚古墳(12)がある。平成10年度に富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所によって試掘調査が行われ、全長66m・高さ8.8m、出土した土器の時期から県内最古級の前方後方墳であることが確認されている。〔富山県文化振興財団2003〕

王塚古墳(13)は、全長58m・高さ7.6mの前方後方墳である。発掘調査は実施されていないが、墳丘の形態、立地などから勅使塚古墳に後続する時期であると考えられている。

富崎丘陵東縁辺部には富崎千里古墳群(14)がある。平成12年度に試掘調査を実施し、前方後方墳1、円墳1、方墳15基からなる古墳群であることが確認されている。〔婦中町教育委員会2002〕

これら弥生時代後期後半ー古墳時代初頭の遺跡群のうち、王塚古墳・勅使塚古墳・千坊山遺跡・六治古塚墳墓・向野塚墳墓・富崎墳墓群・富崎千里古墳群の7遺跡は、地域の弥生時代から古墳時代への移り変わりを示す遺跡が良好に保存されている北陸でも代表的な事例であると評価され、平成17年3月「王塚・千坊山遺跡群」として国史跡に追加指定された。

舘本郷Ⅱ遺跡で検出された弥生時代の遺構も、「王塚・千坊山遺跡群」で確認されている遺構・遺物と同時期であり、検出された遺構が首長クラスの集落に根差す祭祀場と推測されていることから、深い関連を持つと考えられる。

奈良・平安時代の遺跡では、翠尾Ⅰ・南部Ⅰ遺跡で、8～10世紀前半の集落が確認されているほか鍛冶町遺跡、富崎遺跡、下邑東遺跡(15)で集落が確認されている。

中世の遺跡としては、翠尾Ⅰ・小倉中稲遺跡(16)で12世紀後半～13世紀・14世紀前半・15世紀後半～16世紀前半の3時期を中心とした集落が確認されている。

山田川両岸の丘陵上には、神保氏の根拠地である富崎城(17)や、支城群が山々に立地する。

本遺跡に関連する伝承として、『肯構泉達録』によれば、天長年間(824～833)に天子の代官水谷蔵人が舘本郷村(現富山市八尾町舘本郷)に派遣され居住していたとある。本遺跡や翠尾Ⅰ・南部Ⅰ遺跡の八尾地域側で確認されている古代の遺構の時期と重なり、関連が推測される。

図１　計画図及び遺跡所在範囲図（S=1/7500）

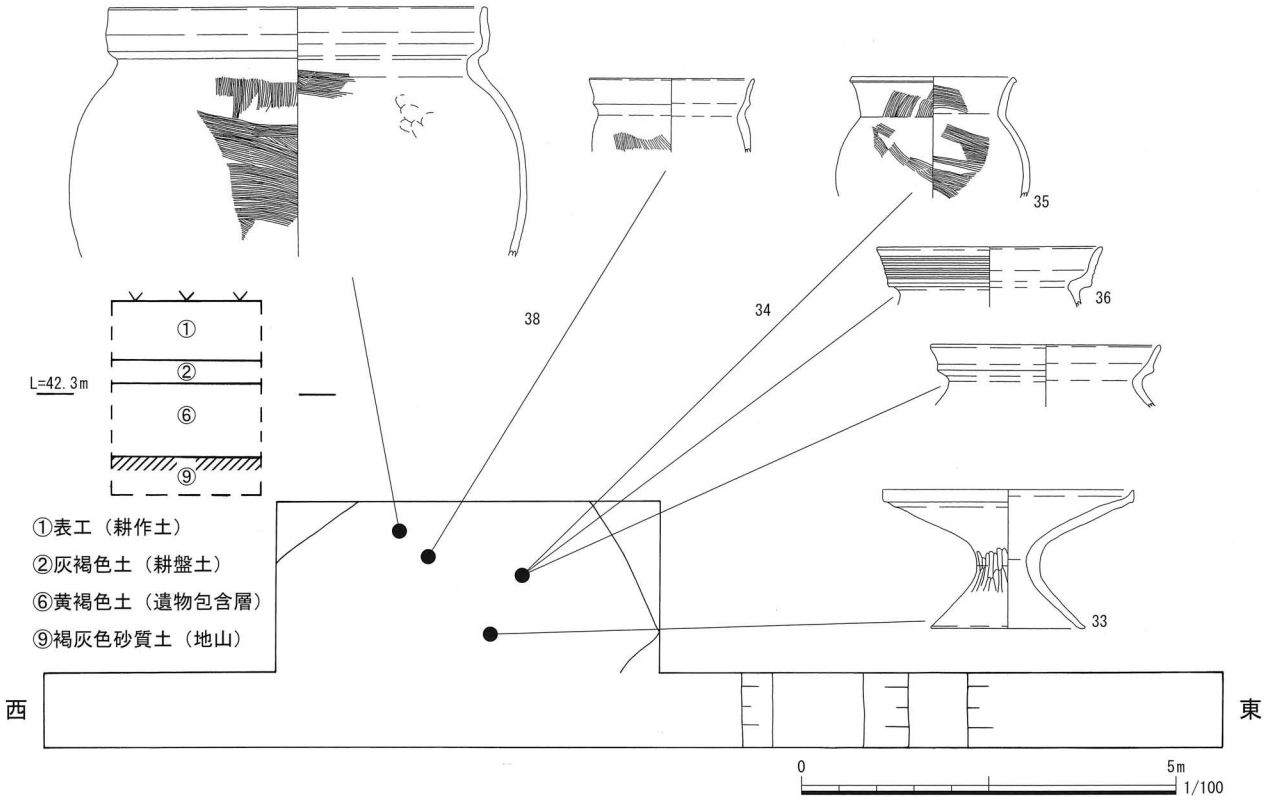


図 2　平成 20 年度 19 トレンチ遺物出土状況図 (S=1/100、遺物実測図は 1/6)

図 3　試掘トレンチ位置図 (S=1/2500)

1. 舘本郷Ⅱ遺跡　2. 翠尾Ⅰ・南部Ⅰ遺跡　3. 田中館跡　4. 富崎赤坂・離山砦遺跡　5. 千坊山遺跡　6. 六治古塚墳墓
7. 向野塚墳墓　8. 鍛冶町遺跡　9. 鏡坂墳墓群　10. 富崎遺跡　11. 富崎墳墓群　12. 勅使塚古墳　13. 王塚古墳
14. 富崎千里古墳群　15. 下邑東遺跡　16. 翠尾Ⅱ・小倉中稲遺跡　17. 富崎城跡

図4　周辺の遺跡分布図 (S=1/25000)

図 5　調査区位置図（S=1/2500）

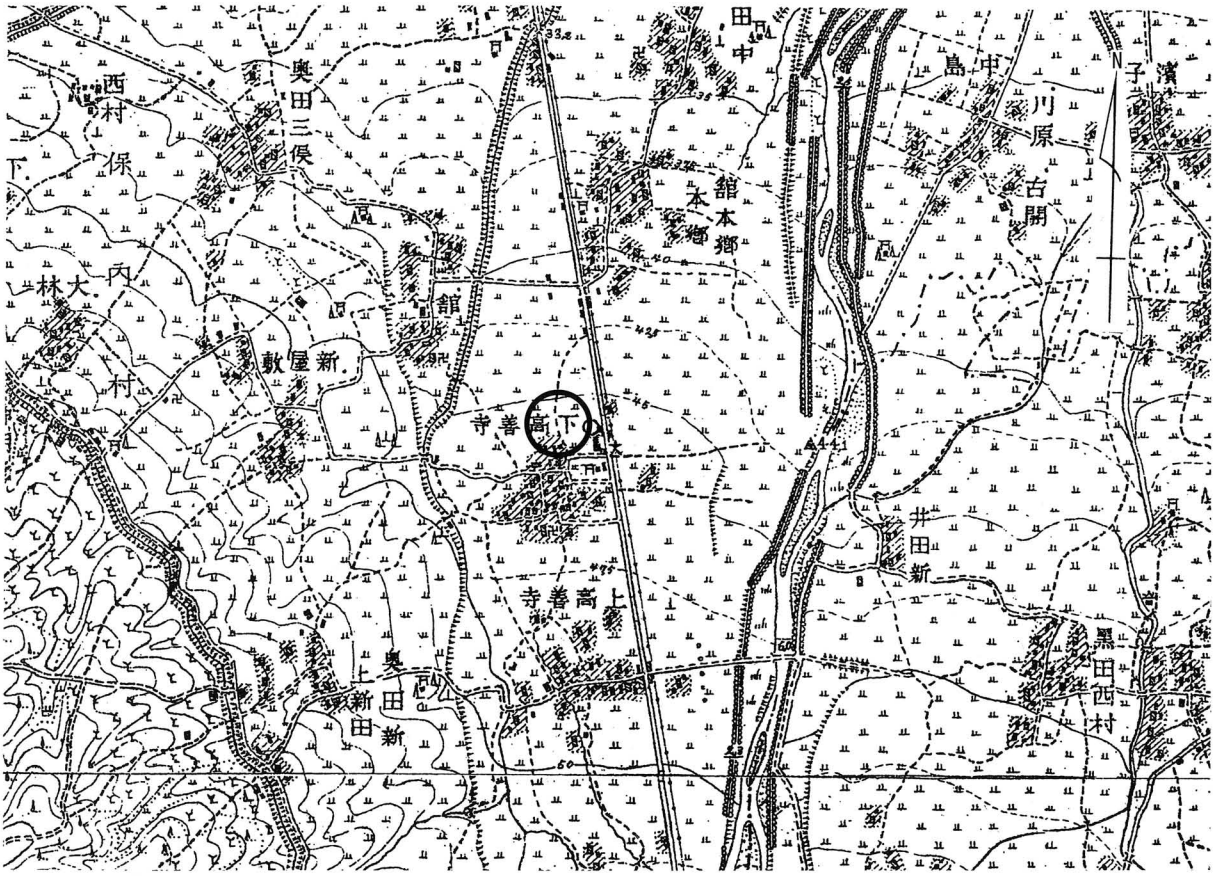


図 6　陸地測量部の迅速図（明治 43 年発行）上の調査対象地位置図 (S=1/25000)

第Ⅲ章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

発掘調査区は、保内小学校西側をＡ区、高善寺公民館北側をＢ区として設定した（図5）。発掘調査面積はＡ区 136.5 ㎡、Ｂ区 195.4 ㎡、合計 331.9 ㎡である。

発掘調査は、最初に造成盛土・耕作土を試掘調査の結果をふまえながら遺物包含層上面までバックホウにより掘削・除去した。その後、遺物包含層上面から人力による掘削を行った。

包含層掘削が完了した部分から、遺構検出、遺構掘削を行った。遺構は断面観察用の畦を残して掘削し、断面を写真と図面に記録した後完掘した。遺物が出土した遺構は、遺物出土状況写真と図面に記録した後、完掘した。遺物はトータルステーションを使用して、位置と高さを記録した。

図面は、平面図・断面図・遺物出土状況図とも縮尺 20 分の 1 を基本として作成した。

カメラは現地調査では 35 ㎜・ブローニー（6 × 7）サイズを使用し、フィルムはカラーリバーサルと白黒を使用した。遺物写真は 4 × 5 サイズを使用し、フィルムは白黒を使用した。

第２節　基本層序

調査区の基本層序は、調査区壁面を用いて観察を行った。

Ａ区の層序は、部分的に見られる撹乱などを除き、以下の 4 つの層に分けることができる。今回の調査ではⅣ層上面で遺構の検出を行った。

Ⅰ層：暗褐色粘質土（耕作土）層厚 20 ～ 30 ㎝

Ⅱ層：褐色砂質シルト、鉄分混（耕盤土）層厚 5 ～ 10 ㎝

Ⅲ層：黄褐色砂質土、鉄分・炭化物混（遺物包含層）層厚 10 ㎝

Ⅳ層：にぶい黄褐色砂質シルト（地山）

Ｂ区の層序は、部分的に見られる撹乱や後世の整地などを除き、以下の 3 つの層に分けることができる。今回の調査ではⅢ層上面で遺構の検出を行った。

Ⅰ層：暗褐色粘質土（耕作土）層厚 15 ～ 20 ㎝

Ⅱ層：灰白色シルト、鉄分混（遺物包含層）層厚 30 ～ 40 ㎝

Ⅲ層：灰褐色ーにぶい黄褐色砂質土（地山）

第３節　遺構

1　Ａ区

弥生時代終末期の溝・土坑 4 基・ピット、平安時代の土坑 1 基、近世ー近代、時期不明の溝・土坑・根石などを確認した。

弥生時代の遺構は調査区南部に集中しており、中世以降の遺構は調査区中央より北に分布している。

(1) 溝

ＳＤ３１　調査区南端を西から東へ流れる。検出長 2.15 m、幅 1.1 m、深さ 0.32 mで、平面形は西が狭く、東に向かって広くなる。断面は舟底形を呈する。遺構埋土は単層である。溝が構築されて間もなく一度埋まり、その後一気に堆積したと考えられる。

遺物は弥生土器甕・壺等が埋土全体から出土した。遺物の時期から、月影～白江期と考えられる。

(2) 土坑

ＳＫ３３　円形を呈する。長軸 0.8 m、短軸 0.7 m、深さ 0.08 m。SK34 を切っている。断面は舟

底形である。遺構埋土は単層で、一気に堆積したと考えられる。炭化物等は見当たらない。貼床や硬化面、柱痕跡等は確認できなかった。

遺物は弥生土器が出土した。周辺の遺構の時期から、月影～白江期と考えられる。

ＳＫ３４　方形を呈する。長軸1.3ｍ、短軸1ｍ、深さ0.23ｍ。断面は舟底形である。南をSK32に、北西をSK33に、東を調査区端に切られているため、遺構の全容は不明確である。遺構埋土は単層で、一気に堆積したと考えられる。東寄りに東西0.4ｍ×南北0.5ｍの範囲で熱を受けた痕跡を確認した。炭化物等は見当たらない。貼床や硬化面、柱穴等は確認できなかったため、竪穴建物ではなく、屋外炉等の性格が考えられる。

遺物は弥生土器甕等が遺構底面近くから出土した。遺物の時期から、月影～白江期と考えられる。

ＳＫ３５　円形を呈する。長軸1ｍ、短軸0.8ｍ、深さ0.15ｍ。調査区西端に切られる。断面は舟底形である。遺構埋土は単層で、一気に堆積したと考えられる。貼床や硬化面、柱穴等は確認できなかった。

遺物は弥生土器甕等が出土した。遺物の時期から、月影～白江期と考えられる。

ＳＫ３２　楕円形を呈する。長軸1.45ｍ、短軸1.15ｍ、深さ0.5ｍ。断面は台形である。遺構埋土は単層で、一気に堆積したと考えられる。埋土には炭化物等は見当たらない。貼床や硬化面、柱穴等は確認できなかった。

遺物は須恵器・土師器・礫が埋土全体から出土した。遺物の時期から、8～9世紀代と考えられる。

ＳＫ３８　楕円形を呈する。長軸5.1ｍ、短軸1.1ｍ、深さ0.31ｍ。断面は台形である。遺構埋土は単層で、遺構が構築されて間もなく一気に堆積したと考えられる。貼床・硬化面・焼土・柱穴等は確認できなかった。出土遺物は須恵器・土師器・珠洲等が出土した。

(3) ピット

ＳＰ３０　円形を呈する。直径0.4ｍ、深さ0.19ｍ。断面はU字型である。遺構埋土は単層で、自然堆積と考えられる。柱痕跡等は確認できなかった。出土遺物には弥生土器甕がある。

ＳＰ３６　円形を呈する。直径0.6ｍ、深さ0.21ｍ。断面は舟底型である。遺構埋土は単層で、自然堆積と考えられる。柱痕跡等は確認できなかった。出土遺物には弥生土器がある。

ＳＰ３７　円形を呈する。直径0.4ｍ、深さ0.25ｍ。断面はU字型である。遺構埋土は単層で、自然堆積と考えられる。柱痕跡等は確認できなかった。出土遺物には弥生土器、礫がある。

(4) その他の遺構

ＳＸ３９　調査区の中央部分で検出した。建物柱の根石の可能性がある集石遺構である。3ヶ所あり、それぞれの間隔はA－B間が1.8ｍ、B－C間が2.4ｍの平面形は長方形であると推測される。長軸は東に3°振っている。

それぞれの根石に柱痕跡等は確認できなかった。遺構からの出土遺物はないが、包含層の遺物はおおむね中世～近代であり、建物の時期も同じような時期であると推測される。

2　B区

古代の溝1・土坑5基、時期不明の溝・土坑などを確認した。出土遺物は細かい破片が多く、包含層から須恵器・珠洲・中世土師器・近世陶磁器など各時代の遺物が出土しているので、遺物の出土していない遺構の帰属時期を特定することは難しい。

(1) 溝

ＳＤ０８　調査区北部を東から西へ流れる。検出長2.4ｍ、幅1.15ｍ、深さ0.19ｍで、平面形は東が狭く西に向かって広くなる。断面は舟底形を呈する。調査区東・西端で切られる。遺構埋土は単層である。溝が構築されて間もなく一度埋まり、その後一気に堆積したと考えられる。遺物は出土していない。

ＳＤ０９　調査区北部を東から西へ流れる。検出長 4.1 m、幅 2.2 m、深さ 0.3 mで、平面形は東が狭く西に向かって広くなる弓状を呈する。断面は台形を呈する。調査区東・西端で切られる。遺構埋土は単層で、締り不良である。溝が構築されて間もなく一気に堆積したと考えられる。

遺物は土師器が出土した。

ＳＤ１０　調査区中央部で東側の肩部を検出した。調査区西端に切られるため、遺構の全容は不明であるが検出長 5.3 m、検出幅 0.7 m、深さ 0.2 mで、南から北に向かって深くなる。断面は台形を呈する。遺構埋土は単層である。溝が構築されて間もなく一気に堆積したと考えられる。遺物は出土していない。

(2) 土坑

ＳＫ０１　不整形を呈する。長軸 1.7 m、短軸 1.1 m、深さ 0.1 m。断面は台形である。遺構埋土は単層で、一気に堆積したと考えられる。貼床や硬化面、柱痕などは確認できない。遺物は弥生土器が出土した。

ＳＫ０３　楕円形を呈する。長軸 1.1 m、短軸 0.6 m、深さ 0.1 m。断面は不整形である。遺構埋土は単層で、一気に堆積したと考えられる。遺構西寄りに拳大の礫が集中して埋まっている。貼床や硬化面、柱痕などは確認できない。遺物は出土していない。

ＳＫ０６　円形を呈する。直径 0.7 m、深さ 0.1 m。断面は舟底形である。遺構埋土は単層で、一気に堆積したと考えられる。遺構南寄りに拳大の礫が集中して埋まっている。貼床や硬化面、柱痕などは確認できない。土師器が出土した。

ＳＫ１１　不整形を呈する。長軸 3.6 m、短軸 1.6 m、深さ 0.5 m。断面は不整形である。遺構埋土は単層で、一気に堆積したと考えられる。遺構南寄りに拳大の礫が集中して埋まっている。礫は総数 312 個のうち、52 個 (16.6％) に熱を受けた痕跡が見られる。出土した位置が一定でないため、他で熱を受け投げ込まれたと推測される。焼土、貼床、硬化面、柱痕跡などは確認できない。遺物は出土していない。

ＳＫ１３　方形を呈する。長軸 2.9 m、短軸 1.6 m、深さ 0.5 m。断面は台型である。遺構埋土は単層で、遺構が構築されて間もなく一度埋まり、その後一気に堆積したと考えられる。貼床や硬化面、柱痕などは確認できない。遺物は土師器が出土した。

ＳＫ１５　方形を呈する。長軸 0.9 m、短軸 0.8 m、深さ 0.65 m。断面は台型である。遺構埋土は単層で、地山混じりの埋土が堆積した後黒色土が堆積していると考えられる。遺物は土師器が出土した。

(3) ピットその他

ＳＰ１４　円形を呈する。直径 0.6 m、深さ 0.22 m。断面は台形である。長軸 0.3 m、短軸 0.25 mの石が据えられている。遺構埋土は単層で、自然堆積と考えられる。柱痕跡等は確認できない。遺物は出土しなかった。

ＳＰ２３　円形を呈する。直径 0.3 m、深さ 0.14 m。断面は台形である。遺構埋土は単層で、自然堆積と考えられる。柱痕跡等は確認できない。遺物は出土しなかった。

ＳＰ２４　円形を呈する。直径 0.3 m、深さ 0.15 m。断面は台形である。遺構埋土は単層で、自然堆積と考えられる。柱痕跡等は確認できない。遺物は出土しなかった。

ＳＸ１２　長軸 2.4 m、短軸 0.8 m、深さ 0.25 mの溝の上に 0.8 m間隔で礫が 3 つ並ぶ。断面は舟底形である。遺構埋土は 3 層で、自然堆積と考えられる。柱痕跡等は確認できない。遺物は出土しなかった。

調査区	遺構番号	平面形態	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	断面形態	出土遺物	備考
A区	SP30	（円形）	0.4（検出長）	0.35	0.19	U字形	弥生土器	調査区南端に切られる。
	SD31	曲線	2.15（検出長）	1.1	0.32	舟底形	弥生土器	
	SK32	楕円形	1.45	1.15	0.5	台形	土師器・須恵器・礫	SK34を切っている。
	SK33	円形	0.8	0.7	0.08	舟底形	弥生土器	SK34を切っている。
	SK34	方形	1.3	1	0.23	舟底形	弥生土器	SK32・33に切られる。 被熱の痕跡東西0.4m×南北0.5mの範囲で広がる。
	SK35	（円形）	1（検出長）	0.8	0.15	舟底形	弥生土器	調査区西端に切られる。
	SP36	（円形）	0.6（検出長）	0.4	0.21	舟底形	弥生土器・礫	調査区東端に切られる。
	SP37	（円形）	0.4（検出長）	0.25	0.25	U字形	弥生土器・礫	調査区東端に切られる。
	SK38	（楕円形）	5.1（検出長）	1.1（検出長）	0.31	台形	土師器・須恵器・中世土師器・珠洲	
	SX39	L字形	2.45	1.8	—	—		A-B間1.8m、B-C間2.4m 建物の根石か？
	SD40	不整形	3.7	1.15	0.37	舟底形	弥生土器・土師器・須恵器・中世土師器	
	SK41	楕円形	0.95	0.5	0.16	台形	珠洲	
	SK42	（円形）	0.65（検出長）	0.45	0.12	舟底形		調査区東端に切られる。
	SK43	（円形）	0.55（検出長）	0.3	0.11	不整形		調査区東端に切られる。
	SK44	円形	0.4	0.35	0.22	台形		SP45を切っている。
	SK45	円形	0.4	0.4	0.15	舟底形	土師器・須恵器	SP44に切られる。
B区	SK01	不整形	1.7（検出長）	1.1（検出長）	0.1	台形	弥生土器	調査区西端に切られる。
	SK02	（円形）	0.8（検出長）	0.55	0.16	台形		調査区西端に切られる。
	SK03	（楕円形）	1.1（検出長）	0.6	0.1	不整形		礫詰まっている。 調査区西端に切られる。
	SP04	円形	0.35	0.3	0.1	舟底形		
	SP05	円形	0.4	0.35	0.1	舟底形		
	SK06	円形	0.7	0.7	0.1	舟底形	土師器	
	SK07	（楕円形）	1.25（検出長）	1.1	0.1	不整形	土師器	調査区西端に切られる。
	SD08	直線	2.4（検出長）	1.15	0.19	舟底形		調査区東・西端に切られる。
	SD09	曲線	4.1（検出長）	2.2	0.3	台形	土師器	調査区東・西端に切られる。
	SD10	弧線	5.3（検出長）	0.7（検出長）	0.2（検出長）	台形		東側肩部を検出。 調査区西端に切られる。
	SK11	不整形	3.6	1.6	0.5	不整形	礫	礫の総数312個、被熱している数52個 被熱した礫の割合16.6% (52個/312個≒16.6)。
	SX12	直線	2.4（検出長）	0.8	0.25	舟底形	礫（根石？）	礫が3つ並ぶ。
	SK13	方形	2.9（検出長）	1.6（検出長）	0.5	台形	土師器	調査区東端に切られる。
	SP14	円形	0.6	0.6	0.22	台形	根石？	
	SK15	方形	0.9	0.8	0.65	台形	土師器	
	SP16	円形	0.3	0.3	0.13	U字形		
	SK17	（長方形）	1.2（検出長）	0.6	0.6	台形		調査区西端に切られる。
	SP18	楕円形	0.4	0.3	0.12	台形		調査区北端に切られる。
	SP19	円形	0.35	0.35	0.1	舟底形		
	SP20	円形	0.4	0.35	0.1	舟底形		
	SP21	楕円形	0.4	0.3	0.1	舟底形		
	SP22	円形	0.4	0.35	0.55	U字形		
	SP23	円形	0.3	0.3	0.14	台形		SP24と同一建物か。
	SP24	円形	0.3	0.3	0.15	台形		SP23と同一建物か。
	SP25	円形	0.4	0.35	0.55	台形		
	SK26	（円形）	0.85（検出長）	0.45	0.65	U字形		調査区西端に切られる。

表1　遺構一覧表

第４節　遺物

遺物は、遺構及び包含層から弥生土器、須恵器、土師器、珠洲、中世土師器、近世陶磁器などが収納コンテナ（長さ60㎝×幅40㎝×深さ10㎝）に換算して９箱出土した。内訳は、Ａ区が８箱でＢ区が１箱である。なお、参考として平成20年度の試掘調査で出土した遺物も掲載しておく。

１　Ａ区

ＳＰ３０　１は弥生土器の有段口縁甕である。強めに屈曲する段から直立する口縁部をもつ。口縁端部がわずかに外反する。口縁内部に指頭圧痕が確認できる。内・外面とも煤・炭化物は付着しない。

ＳＤ３１　２・３は弥生土器である。２は甕か壺の口縁端部である。外傾する口縁部で、口縁端部は短く直立する。調整は確認できない。内・外面とも煤・炭化物は付着しない。３は短頸有段壺である。段の屈曲は弱く、口縁部は外傾しながら伸展し、口縁端部は外反しながら丸くおさめる。擬凹線は単位や数は確認できない。胴部はやや下膨れの球形で、外面は横方向のミガキ、内面はハケで調整される。外面胴部下部に黒斑が確認できる。内・外面ともに煤・炭化物は付着しない。

ＳＫ３４　４・５は弥生土器である。４は有段口縁甕である。外傾しながら直立する口縁部で、口縁端部はわずかに外反しながら丸くおさめる。段の屈曲は強い。内・外面に指頭圧痕が確認できる。頸部から下は内面が横方向のハケ、外面が斜め方向のハケで調整される。煤・炭化物は付着しない。５は甕か壺の底部である。底径8.0㎝でわずかに内湾し、内・外面とも左斜め方向にハケ調整を施す。煤・炭化物は付着しない。球形の器形の胴部になると考えられる。

ＳＫ３５　６は弥生土器甕か壺の底部である。底径12.0㎝で外反する。内･外面とも調整不明である。煤・炭化物は付着しない。倒卵形の器形の胴部になると考えられる。

ＳＫ３２　７は須恵器坏の口縁部である。外傾しながら伸展し、口縁端部は外反しながら丸くおさめる。８は土師器皿の底部である。底部に回転糸切りの痕跡が確認できる。９は須恵器双耳瓶である。耳部分は破損している。

ＳＫ３８　10～12は須恵器である。10は須恵器坏か皿の口縁部である。体部は外傾して内湾しながら口縁端部はほぼまっすぐに丸くおさめる。11は坏Ｂの底部。12は坏Ａの底部である。13は珠洲の甕口縁部である。外面タタキ調整である。

ＳＤ４０　14は弥生土器である。壺の頸部と思われるが、残存部だけでは全体の器形の判断はできない。内・外とも調整不明である。15は珠洲甕の底部である。外面タタキ調整である。

包含層その他　16～18は弥生土器である。包含層出土。19～21は須恵器である。22は土師器皿である。23は青磁碗である。外面に蓮弁文を施す。15世紀後半～16世紀前半。24は唐津碗である。調査区中央部礫層から出土。25は弥生土器である。26は中世土師器皿である。非ロクロ成形で丸底、指頭圧痕が残る。口縁端部に煤が付着する。15世紀代。排水溝掘削で出土。32は瀬戸美濃の碗底部で、灰白色の胎土に内・外面とも黒色の鉄釉がかかる。削り輪高台である。表土掘削で出土。

２　Ｂ区

遺構からの出土遺物は細かい破片のみであり、実測・掲載できる遺物はなかった。

包含層その他　27は須恵器壺胴部、28は須恵器高坏脚部である。29～31は中世土師器皿である。29は口径8.6㎝、胎土は密、焼成は良好、灰白色を呈する。30は口径13.6㎝、胎土は密、焼成は良好、にぶい黄橙色を呈する。31は口径13.6㎝、胎土は密、焼成は良好、にぶい黄橙色を呈する。

３　試掘調査出土遺物

(1) Ｈ20-19トレンチ　平成20年度の試掘調査では、Ａ区の西20ｍにある19トレンチで弥生時代の土器溜まり・溝が検出された。現地は田面調整によって現状保存されている。

33は器台である。長めの外傾・外反する受部に短く立ち上がる口縁端部が付く。脚部は短く裾部

で外反する。脚上部に縦方向のミガキ調整が確認できる。赤彩は確認できない。煤・炭化物は付着しない。34は有段口縁甕である。段の屈曲は弱く、口縁端部が外反する。35は「く」の字状口縁甕で、口縁端部を面取りする。頸部は強く屈曲する。36～41は有段口縁甕である。36は擬凹線5条を施す。口縁端部は外反しながら伸びる。37は段の屈曲は弱く、擬凹線は施されない。38は頸部が強く屈曲し、内湾しながら口縁端部が外反する。39は頸部が弱く屈曲する。内湾する口縁部が付く。40は頸部が強く屈曲し、口縁部はまっすぐ立ちあがる。41は頸部が強く屈曲し、外反する短めの口縁部が付く。口縁端部は丸く収める。42・43は「く」の字状口縁甕で、42・43とも頸部の屈曲は強く、外反する口縁部が付く。口縁端部は面取りする。44は有段口縁甕で、擬凹線6条を施す。口縁端部はやや外反しながら伸びる。45は「く」の字状口縁甕である。頸部外面に煤が付着する。46は有段口縁甕で、頸部は強く屈曲し、口縁部は外傾し、口縁端部は直線的に立ち上がる。47は長頸有段壺で、頸部は屈曲しながら口縁内面は受口状を呈する。口縁端部は上方に短く摘み上げる。

(2) 平成19年度　48・54は須恵器坏蓋である。48は器厚が薄く口縁端部を丸く収める。9世紀前半。54は口縁部内面に返りが付く。7世紀後半代。49・52・55は須恵器坏身である。49・55は8世紀中頃、52は9世紀前半。50・51は土師器甕である。50は口縁が外反しながら伸展する。口縁外面はハケ後ナデ消しする。51は頸部が屈曲せず、直立し丸く収める。口縁端部内面に煤が付着する。56～59・61は珠洲擂鉢である。57と61には口縁端部に櫛描文が施される。61は片口鉢である。時期はおおむね13世紀後半～14世紀代と考えられる。60は越中瀬戸擂鉢である。

番号	出土地点		形態				胎土		焼成	色調		成形・調整		備考
			器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	質	砂粒		内面	外面	内面	外面	
1	A区	SP30 No.2	弥生土器・甕	31.6	－	－	やや疎	2mm砂多し	良	5YR7/6 橙	5YR6/8 橙	指頭圧痕	ナデ	内面の一部 10YR6/3にぶい黄橙
2	A区	SD31 No.5	弥生土器	13.2	－	－	やや疎	2～3mm砂多し	良	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	調整不明	調整不明	
3	A区	SD31	弥生土器・壺	－	11.7	－	密		良	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	ハケ	口縁部擬凹線？ミガキ	
4	A区	SK34	弥生土器・甕	30.0	－	－	密		良	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	ハケ＋指頭圧痕	ハケ	
5	A区	SK34 No.6	弥生土器	－	4.0	8.0	密		良	10YR5/1 褐灰	10YR8/3 浅黄橙	ハケ＋ミガキ	ハケ底部ケズリ	
6	A区	SK35	弥生土器	－	5.5	12.0	密		良	10YR7/1 灰白	10YR8/4 浅黄	調整不明	調整不明	
7	A区	SK32	須恵器・坏	10.0	－	－	密	0.5～1mm	良	N6/ 灰	N6/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
8	A区	SK32	古代土師器・皿	－	1.3	12.0	密		良	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ロクロナデ	ロクロナデ	底部糸切り痕
9	A区	SK32 No.1	須恵器・瓶	－	－	－	密		良	10YR6/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
10	A区	SK38	須恵器・坏	12.0	－	－	密	0.2～0.5mm	良	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
11	A区	SK38	須恵器・坏B	－	－	7.0	密	0.2～0.5mm	良	7.5YR7/1灰白	7.5YR7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
12	A区	SK38	須恵器・坏A	－	－	8.0	密	1～2mm	良	N6/ 灰	N6/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
13	A区	SK38	珠洲・甕	30.0	－	－	密		良	N6/ 灰	N6/ 灰	ナデ？	タタキ	
14	A区	SD40	弥生土器	－	－	－	密	1～2mm	良	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	調整不明	調整不明	
15	A区	SD40	珠洲・甕	－	3.9	20.0	密		良	5Y 灰	5Y 灰	当て具痕	タタキ	
16	A区	包含層	弥生土器・壺	－	24.7	15.4	密		良	10YR8/8 黄橙	7.5YR5/8 明褐	ハケ＋ミガキ	ナデ？	
17	A区	包含層	弥生土器・甕	23.2	－	－	やや密	1mm	良	10YR8/3 浅黄橙	10YR3/1 黒褐	調整不明	調整不明	
18	A区	包含層 北側	弥生土器・甕	17.2	－	－	やや密		良	10YR8/2 灰白	10YR4/2 灰黄褐	ナデ	ハケ後ナデ	
19	A区	レキ層	須恵器・蓋	10.8	3.3	－	密		良	N7/ 灰白	N6/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
20	A区	レキ層 中央部	須恵器・蓋	12.0	－	－	密		良	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
21	A区	レキ層	須恵器・蓋	－	－	7.0	密		良	N6/ 灰	N6/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
22	A区	レキ層	土師器・皿	－	－	7.4	密		不良	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
23	A区	レキ層 中央部	青磁・碗	14.8	－	－	密		良	2.5GY6/1 オリーブ灰	2.5GY6/1 オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土 N5/ 灰

表2　遺物観察表 (1)

番号	出土地点		形態				胎土		焼成	色調		成形・調整		備考
			器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	質	砂粒		内面	外面	内面	外面	
24	A区	レキ層	唐津・碗	14.0	—	—	密		良	5Y4/3灰オリーブ	5Y4/3灰オリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土 5Y6/1 灰
25	A区	排水溝	弥生土器・壺	17.0	—	—	やや密		良	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	ナデ	ハケ後ミガキ？	
26	A区	排水溝	中世土師器・皿	10.0	1.8	2.8	密		良	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/2 灰白	手づくね	手づくね	口縁の一部 タール付着
27	B区	包含層	須恵器・壺	—	7.0	—	密		良	10YR7/1 灰白色	10YR7/1 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	
28	B区	排土	須恵器・高杯脚	—	6.8	—	密		良	10YR7/1 灰白	10YR6/1 褐灰	搾り	ロクロナデ	外面の一部 10YR8/1 灰白
29	B区	包含層	中世土師器・皿	8.6	—	—	密		良	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	調整不明	調整不明	
30	B区	排土	中世土師器・皿	13.6	—	—	密		良	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	調整不明	調整不明	
31	B区	黒色土	中世土師器・皿	13.6	—	—	密		良	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	指頭圧痕	指頭圧痕	
32	A区	表土掘削	瀬戸美濃・碗	5.4	—	—	密		良	5Y2/1 黒	5Y2/1 黒	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土 10YR7/1 灰白
33	試掘19T	Bグリット	弥生土器・器台	20.0	—	—	密	1mm	良	10R6/8 赤橙	2.5R7/8 橙	調整不明	ヘラミガキ	
34	試掘19T	拡張区E グリット E	弥生土器・甕	13.2	—	—	疎	1～4mm	良	10R8/3 浅黄橙	10R5/3 にぶい黄褐	調整不明	ハケ	
35	試掘19T	拡張区E グリット	弥生土器・甕	13.0	—	—	やや密	1～3mm	良	10YR6/2 灰黄褐	5YR7/3 にぶい橙	ハケ	ハケ	
36	試掘19T	拡張区E グリット D	弥生土器・甕	17.8	—	—	疎		良	10YR7/6 明黄褐	10YR7/4 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	擬凹線5条
37	試掘19T	拡張区 地山一括	土師器・壺	18.2	—	—	疎		不良	2.5YR5/8 明赤褐	5YR4/8 赤褐	ナデ	ナデ	
38	試掘19T	拡張区E グリット H	弥生土器・甕	30.0	—	—	密	1～3mm	良	10YR8/1 灰白	10YR8/2 灰白	ハケ	ハケ	
39	試掘19T	拡張区B グリット K	弥生土器・甕	17.2	9.1	-	やや粗	2mm	やや良好	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	ナデ	ナデ	口縁部擬凹線
40	試掘19T	拡張区B グリット K	弥生土器・甕	21.8	6.1	-	やや粗	5mm以下	やや不良	2.5Y7/2 灰黄	10YR8/2 灰白	ナデ	ナデ	
41	試掘19T	拡張区 地山中一括	弥生土器・甕	9.1	2.5	-	やや粗	1～3mm	不良	2.5Y8/3 浅黄	2.5Y8/3 浅黄	ナデ	ナデ	
42	試掘19T	地山中	弥生土器・甕	9.0	9.2	-	やや粗	1～3mm	やや不良	2.5Y7/2 灰黄	10YR8/3 浅黄橙	ナデ	ハケ・ナデ	
43	試掘19T	黄色地山中	弥生土器・甕	6	3.4	-	やや粗	0.5～1mm	良	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	
44	試掘19T	拡張区 地山一括	弥生土器・甕	13.2	4.0	—	やや密	1mm	良	10YR8/2 灰白	10YR6/2 灰黄褐	指頭圧痕	擬凹線	
45	試掘19T	黄色地山中	弥生土器・甕	9.5	2.8	-	密	0.5～1mm	良	2.5Y5/2 黄灰	7.5Y1/6 灰	ナデ	ナデ	
46	試掘19T	地山中	弥生土器・甕	14.5	6.5	-	密	1～2mm	良	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	ナデ	ナデ	
47	試掘19T	拡張区 地山中一括	弥生土器・壺	6.5	4.0	-	やや粗	1～2mm	やや不良	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	ナデ	ナデ	
48	試掘35T	レキ層直上	須恵器・杯蓋	12.6	1.7	—	密		良	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
49	試掘36T	西から19.43m 深さ26cm	須恵器・坏	14.8	3.4	9.8	密		良	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	貼付高台
50	試掘38T	SK03 No.2	土師器・壺	14.6	4.4	—	やや密	1mm	やや良	7.5Y8/3 浅黄橙	5YR7/3 にぶい橙	ハケ+ナデ	ハケ+ナデ	
51	試掘38T	西から32m 深さ38cm	土師器・壺	10.6	3.3	—	密		良	10YR8/2 灰白	10YR5/4 にぶい黄褐	ナデ	ナデ	口縁部 煤付着 10YR5/3にぶい黄褐
52	試掘39T	排土中	須恵器・坏	12.0	3.4	6.2	密	0.5～1mm	良	N6/ 灰	N6/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
53	試掘39T	包含層	中世土師器・皿	8.0	1.3	—	密		良	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	調整不明	調整不明	口縁部 煤付着
54	試掘40T	西から25.5m 深さ52cm	須恵器・杯蓋	11.6	0.9	—	密		良	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
55	試掘40T	西から23.8m 深さ51cm	須恵器・坏	5.0	2.7	7.0	密	0.2～1mm	良	5Y7/2 灰白	5Y7/2 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
56	試掘24T	レキ層直上	珠洲・擂鉢	28.0	3.2	—	密	1～2mm	良	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
57	試掘24T	レキ層直上	珠洲・擂鉢	15.0	5.8	-	密	0.5～1mm	良	N6 灰	7.5Y1/6 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	内面オロシ目 口縁櫛描文
58	試掘24T	レキ層直上	珠洲・擂鉢	36.0	6.5	—	密	1～2mm	良	N6/ 灰	N6/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	内面オロシ目
59	試掘24T	レキ層直上	珠洲・擂鉢	—	4.8	14.2	密	0.5～1mm	良	2.5GY6/1 オリーブ灰	5YR6/1 褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	内面オロシ目
60	試掘23T	レキ層直上	越中瀬戸・擂鉢	11.5	5.1	-	密	1～2mm	良	5YR3/4 暗赤褐	5YR3/4 暗赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ	内面オロシ目
61	試掘15T	包含層（第４層）	珠洲・擂鉢	17.9	9.7	-	密	1～4mm	良	2.5Y5/1 黄灰	7.5Y1/5 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	内面オロシ目 口縁櫛描文

表３　遺物観察表（2）

第Ⅳ章　自然化学分析

第１節　分析の目的と方法

舘本郷Ⅱ遺跡において、遺構の形成年代や遺物が出土していない遺構の時期の検討を目的として、放射性炭素年代測定を実施した。また弥生時代終末期の遺跡周辺の古環境の検討を目的として、珪藻分析を実施した。

第２節　放射性炭素年代測定

㈱吉田生物研究所

１　はじめに

舘本郷Ⅱ遺跡より検出された炭化物３点について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

２　試料と方法

測定試料の情報、調製データは表１のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

表４　測定試料及び処理

No.	測定番号	試料データ	前処理
4	PLD-17613	試料の種類：炭化物 試料の性状：不明 状態：dry 備考：THG-ⅡA区　4 層炭化物 100929	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
5	PLD-17614	試料の種類：炭化物 試料の性状：不明 状態：wet 備考：THG-ⅡA区　SK38　2 層炭化物５点100929	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
7	PLD-17615	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：wet 備考：No.6の代替 THG-ⅡB区　SK11　100823	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)

３　結果

表４に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正した年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が

更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

表5　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

No. 測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
4 PLD-17613	-25.44±0.22	1842±19	1840±20	133AD(43.2%)178AD 187AD(25.0%)213AD	94AD(0.5%)97AD 125AD(94.9%)237AD
5 PLD-17614	-27.69±0.19	372±18	370±20	1460AD(44.8%)1498AD 1505AD(5.5%)1511AD 1602AD(17.9%)1616AD	1450AD(66.8%)1523AD 1574AD(28.6%)1625AD
7 PLD-17615	-27.99±0.20	343±18	345±20	1492AD(26.2%)1523AD 1572AD(26.4%)1603AD 1611AD(15.7%)1630AD	1470AD(36.1%)1530AD 1541AD(59.3%)1635AD

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3-20，日本第四紀学会．

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

第３節　堆積物中の珪藻化石群集分析調査報告

1　はじめに

舘本郷Ⅱ遺跡において行われた発掘調査で、A区より弥生～近世の集落跡が検出されている。今回の発掘調査において遺構が検出された３層（表6）から採取された土壌試料を用いて遺跡周辺の古環境を復元検討する目的で、珪藻化石の分析調査を行った。

表6　分析を行った試料

試料No.	層位	時期	堆積物
1	4層	弥生終末期ー後期後半遺構検出面の土層	砂質粘質土
2	3層	遺物包含層（ただし弥生ー中世まで様々な時期を含む）	砂質粘質土
3	2層	間層（表土と包含層間、近代遺物を含む）	砂質粘質土

2　珪藻化石の特徴と堆積環境

今回は、いずれの試料からも上澄み液も回収するなどしたが、珪藻の種類、量ともに出現率が低かった。以下に分析結果の表と写真を示す。

表7　分析結果

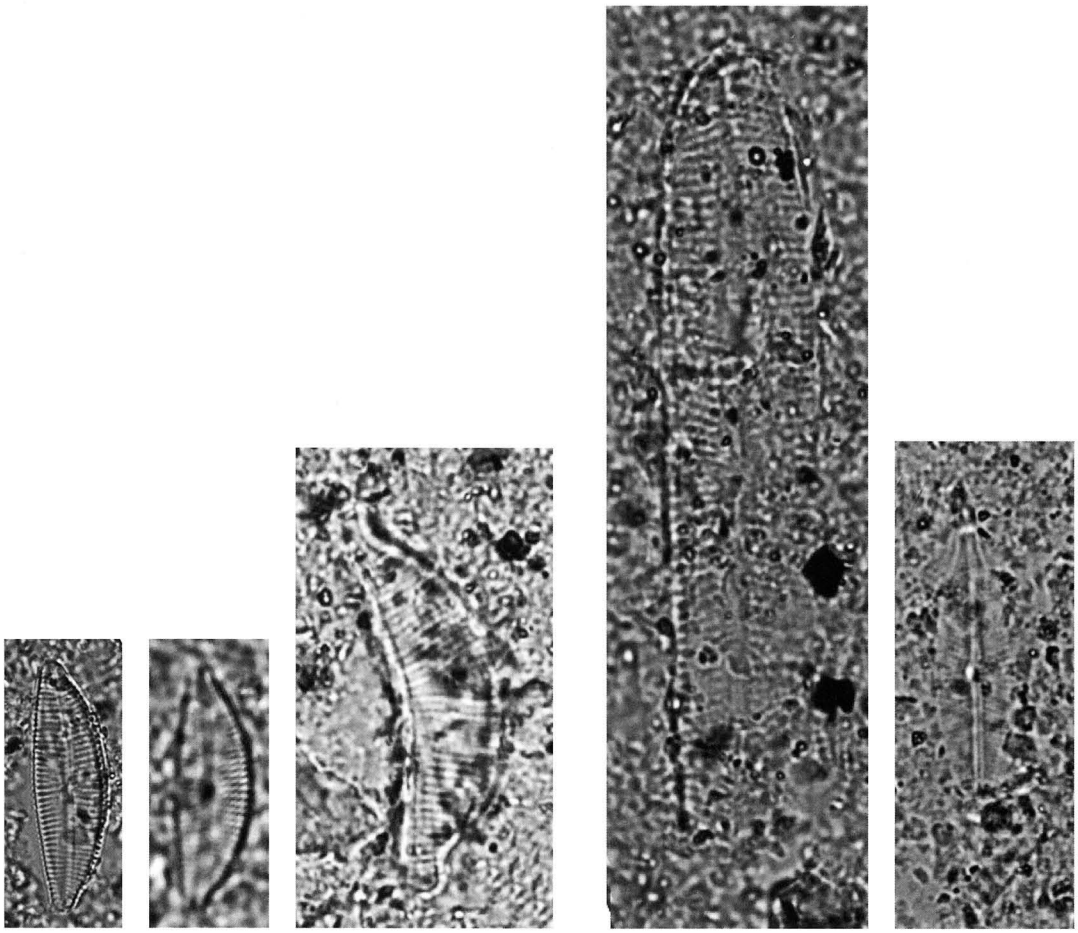
	試料No. 1	試料No. 2	試料No. 3
Eunotia 属	1	-	-
Navicula 属	9	5	2
Pinnularia 属	1	8	3
Caloneis 属	1	-	-
Cymbella 属	17	7	14
Cymbellaturgidula	43	27	37
計	72	37	56

表7から、３層共に中ー下流性河川指標種群の *Cymbellaturgidula* が集中して産出されている。以上の事から中ー下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる環境の可能性が考えられる。

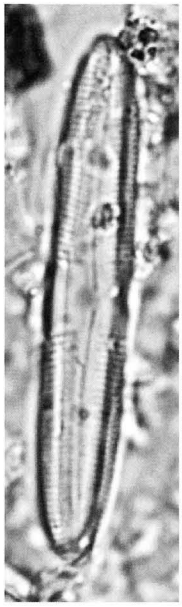
引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73-88.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究，27，1-20.



1　2　3　4　5



6

1：*Cymbella turgidula*　2：*Cymbella* 属　3：*Eunotia* 属　4：*Pinnularia* 属 5：*Navicula* 属
6：*Caloneis* 属　（スケール：20 μ）

第Ⅴ章　総括

今回の発掘調査では、A区で弥生時代終末期ー近代までの遺構、B区で古代の遺構を確認した。調査区が幅約2.5ｍと狭小であったため、遺構の全容が確認できず、性格を掴み切れなかった。

第1節　A区

A区の遺構分布は、調査区南の高台に弥生時代の遺構が集中する。調査区中央を横切るように礫層が堆積し、礫層上面からは須恵器、土師器、珠洲、青磁、近世陶磁器、蹄鉄など様々な時期の遺物が出土している。礫層北側に中世以降の遺構や遺物が分布するという傾向を示す。このことから調査区中央の礫層は古代から近世までの長い期間河川か河原であったと推測される。つまり、弥生時代は集落の北に川が流れ、川が埋まって中世以降の遺構が形成されたという変遷が考えられる。

1　弥生時代

弥生時代の遺構は、溝1・土坑3・ピット3を確認した。ＳＫ34は、遺構中央部に東西0.4ｍ×南北0.5ｍの被熱した部分があるが、変色も薄く火の使用も短い期間であったと考えられる。また、他の遺構も深さが浅いことから、これらの遺構は短期間に営まれたキャンプサイトのような性格であったと考えられる。

今回調査区出土の弥生土器の傾向として、器種は甕・壺が多い。また赤彩品や特殊器台などの祭式土器が1点も出土していない。これは、A区西にある平成20年度試掘調査の際19トレンチで検出した土器溜まりの弥生土器も同様である。

本遺跡においては、平成8年度に今回調査区北の発掘調査で出土した弥生土器が、赤彩品比率が北土器溜まり25%・東土器溜まり29.4%・西土器溜まり14.2%、祭式土器比率が北土器溜まり40.2%・東土器溜まり36.7%・西土器溜まり28.5%といずれも高い比率を示しており、遺構の性格は首長クラスの高いレベルに根差す集落端部の祭祀場であると推測されている。今回の調査結果により、平成8年度調査区の祭祀場のような特殊な性格の遺構周辺に、祭祀場とは性格を異にする集落が点在していると考えられる。

2　中世ー近世の遺構

調査区北寄りで確認した建物の根石と考えられる遺構ＳＸ39は、根石A−B間が1.8ｍ、B−C間が2.4ｍである。調査区の幅が狭小であったため建物の全容が不明ではあるが、根石の大きさから推測できる柱の太さからみて、簡易な建物（作業小屋・倉庫）が考えられる。

発掘調査の際、近所に住む作業員の方からの聞き取りでは、田を直す際に埋納銭が出土したとのことである。今回調査区では青磁なども出土しており、近隣に未確認の中世ー近世の遺構が存在している可能性が高いといえる。

第2節　B区

B区では、古代ー近代と推測される遺構を確認した。古代の遺構種別は、溝1、土坑5である。残りの悪い土坑が多く、集落でも居住域のような中心部分ではなく、集落の端部分と考えられる。

遺物が出土していないため時期の特定はできないが、ＳＫ11は、3つの土坑を合わせたような不整形な平面形で、握り拳大の礫が312個埋まっていた。礫312個のうち被熱した礫が52個含まれる。割合にすると約16.6%となる。しかし被熱した礫は被熱してない礫に混在して出土しており、遺構埋土には焼土や炭化物が見られないため、別の場所で熱を受け、運び込まれたと推測される。

ＳＸ12は、人頭大の礫が3つ、ほぼ等間隔に並んでいる。溝に石を据えたものと考えられるが、

柱痕跡などが確認できず、建物に伴う遺構であるかは判断できない。

八尾地域の遺跡としては初めて珪藻分析による古環境復元と放射性炭素年代測定を行った。今後、この地域での分析結果の蓄積を待って、傾向や相違を分析し、歴史上の姿を復元する一助としたい。

今回の発掘調査によって、遺構、出土遺物ともわずかではあったが、高善寺地区に広がる弥生～近代まで断続的に営まれた集落の様相の一端を明らかにすることができた。

＜引用・参考文献＞

上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究№2』日本貿易陶磁研究会

河合忍・稲石純子　1997　「Ⅳ考察―翠尾Ⅰ遺跡出土の弥生土器について―」『翠尾Ⅰ遺跡発掘調査報告書1』八尾町教育委員会

小杉町教育委員会　1999　『ＨＳ－０４遺跡発掘調査報告』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2003　『富山県ボランティア埋蔵文化財保護活動事業発掘体験講座　婦負郡婦中町勅使塚古墳・中新川郡上市町永代遺跡・東砺波郡福野町安居窯跡群・射水郡小杉町中山中遺跡発掘調査報告』

佐伯哲也　1990　『富崎城塁群の変遷　―富崎城とその周辺の城―』

續伸一郎　1995　「11〔3〕中世後期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編

富山市教育委員会　2008　『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅲ　―若竹町遺跡・富崎遺跡―』富山市埋蔵文化財報告25

富山市教育委員会　2008a　『富山市富崎遺跡発掘調査報告書』　富山市埋蔵文化財調査報告21-(1)

富山市教育委員会　2008b　『富山市富崎遺跡発掘調査報告書』　富山市埋蔵文化財調査報告21-(2)

婦中町教育委員会　1993　『富山県婦中町　小倉中稲Ⅱ遺跡　―県営農地流動化特別促進ほ場整備実験事業（小倉地区）に伴う発掘調査―』

婦中町教育委員会　1993　『富山県婦中町　小倉中稲遺跡発掘調査報告』

婦中町教育委員会　1994　『富山県婦中町　小倉中稲遺跡発掘調査報告(2)』

婦中町教育委員会　2000　『富山県婦中町　県営担い手育成基盤整備事業に係る埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告書―婦中南部地区・千里地区―』

婦中町教育委員会　2002　『富山県婦中町　千坊山遺跡群試掘調査報告書』

婦中町教育委員会　2003　『富山県婦中町　鍛冶町遺跡発掘調査報告』

婦中町教育委員会　2004　『富山県婦中町　砂子田Ａ遺跡発掘調査報告』

文化庁文化財部記念物課　2010　『発掘調査のてびき』

八尾町史編纂委員会　1967　『八尾町史』八尾町役場

八尾町教育委員会　1996　『翠尾Ⅰ遺跡試掘調査概要』

八尾町教育委員会　1997a　『翠尾Ⅰ遺跡発掘調査報告書1』　八尾町埋蔵文化財調査報告第11集

八尾町教育委員会　1997b　『富山県八尾町翠尾Ⅰ遺跡発掘調査報告(2)』　八尾町埋蔵文化財調査報告第12集

八尾町教育委員会　1997c　『富山県八尾町薄尾遺跡・翠尾Ⅰ遺跡・妙川寺遺跡試掘調査報告』　八尾町埋蔵文化財調査報告第13集

八尾町教育委員会　1998a　『富山県八尾町翠尾Ⅰ遺跡発掘調査報告(3)』　八尾町埋蔵文化財調査報告第16集

八尾町教育委員会　1998b　『翠尾Ⅰ・翠尾Ⅱ遺跡試掘調査報告(3)』　八尾町埋蔵文化財調査報告第17集

八尾町教育委員会　1999　『富山県八尾町　翠尾Ａ遺跡発掘調査報告(4)』　八尾町埋蔵文化財調査報告第18集

八尾町教育委員会　2000　『富山県八尾町　埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ　1999年度』　八尾町埋蔵文化財調査報告第22集

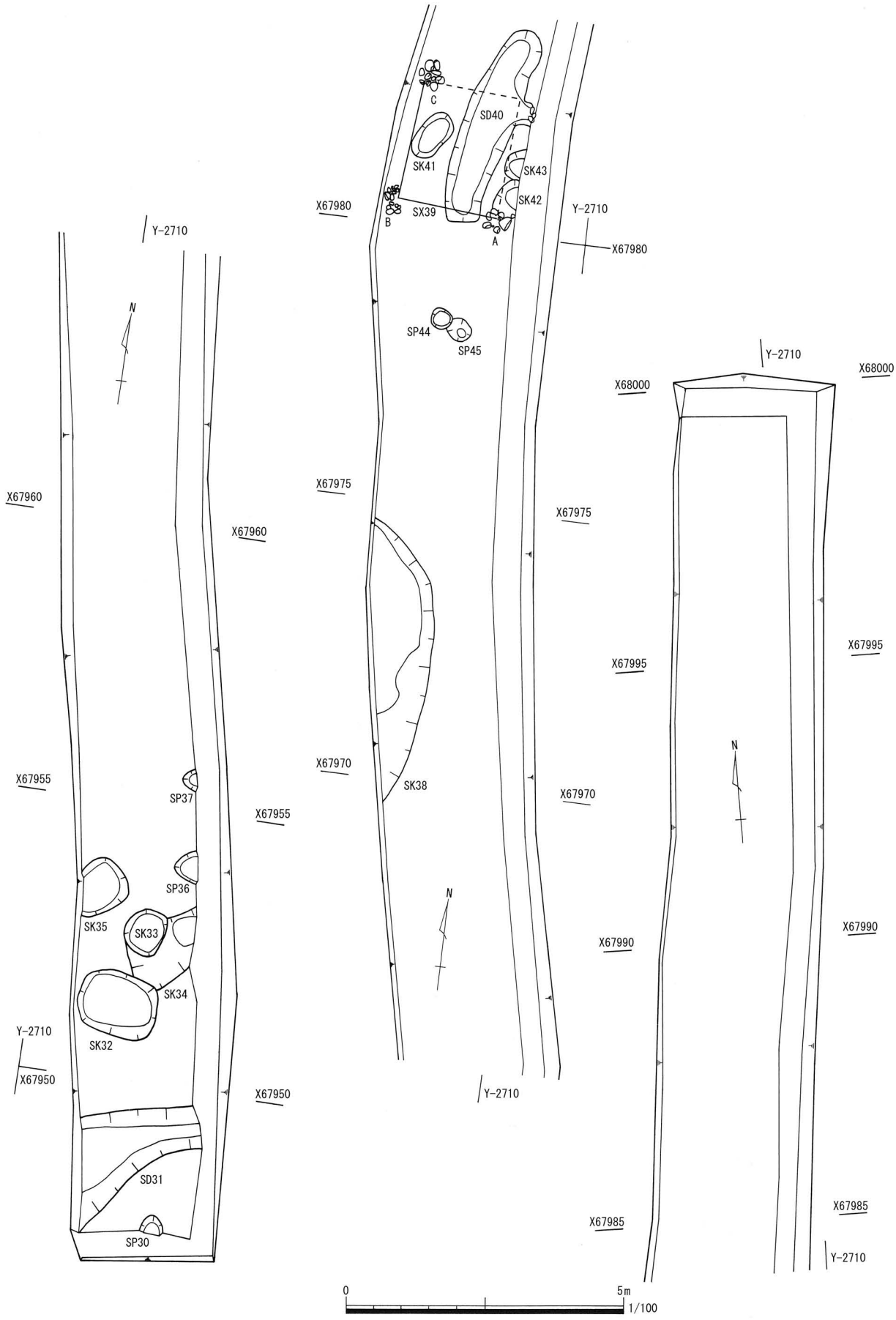


図７　Ａ区遺構配置図（S=1/100）

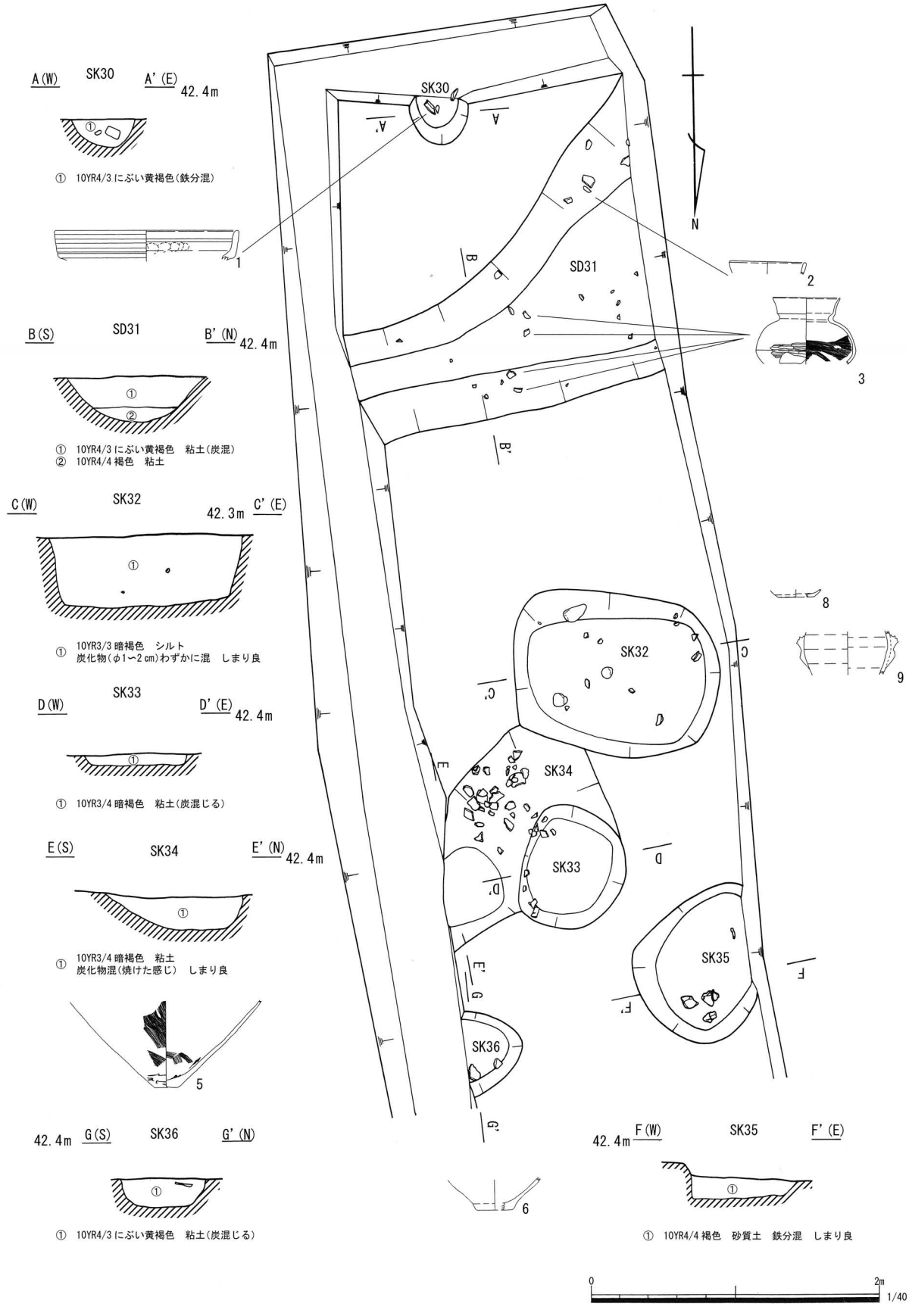


図 8　遺構平面図・遺物出土状況図及び断面図（S=1/40、遺物実測図は 1/10）

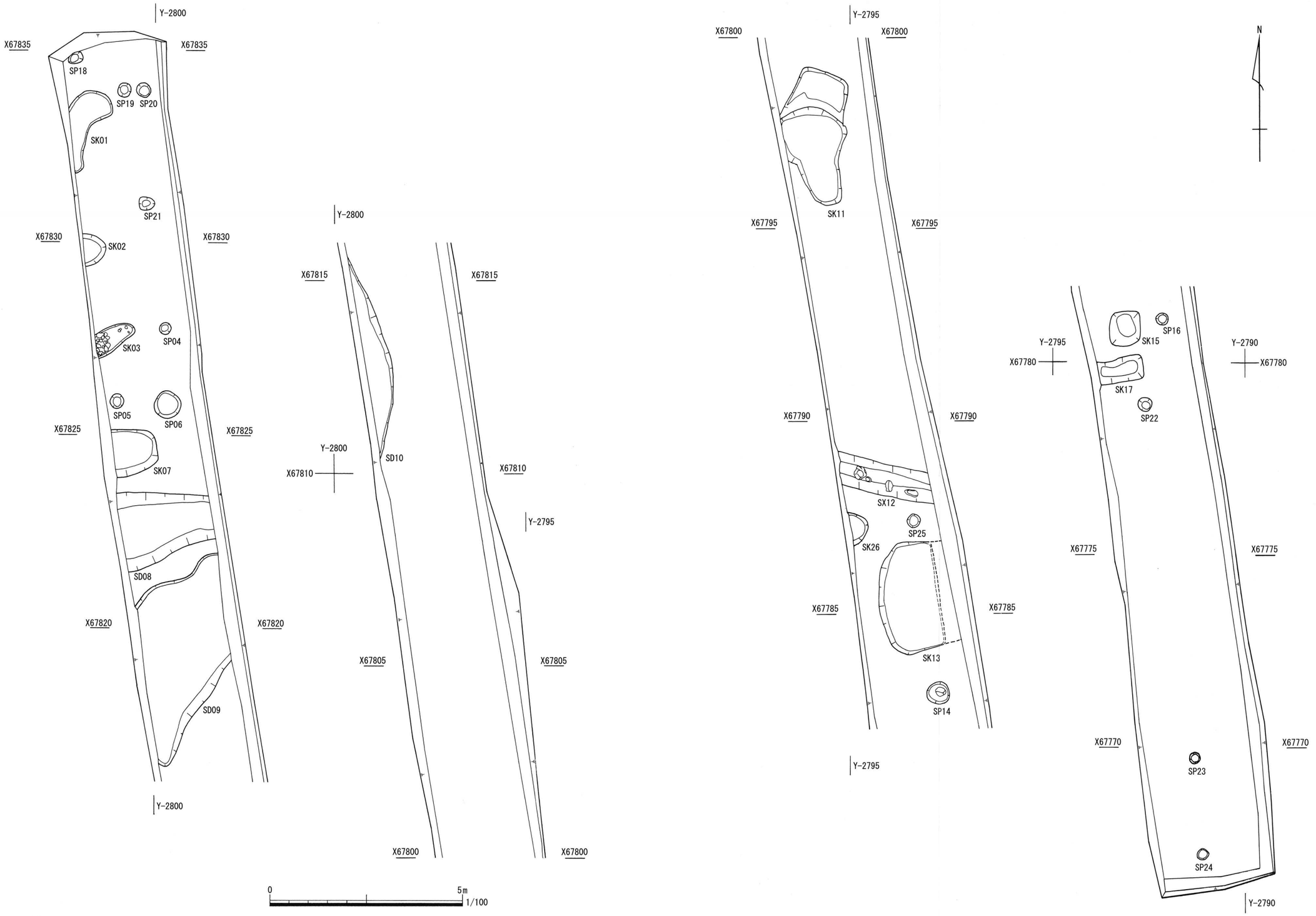


図 9　B区遺構配置図（S=1/100）

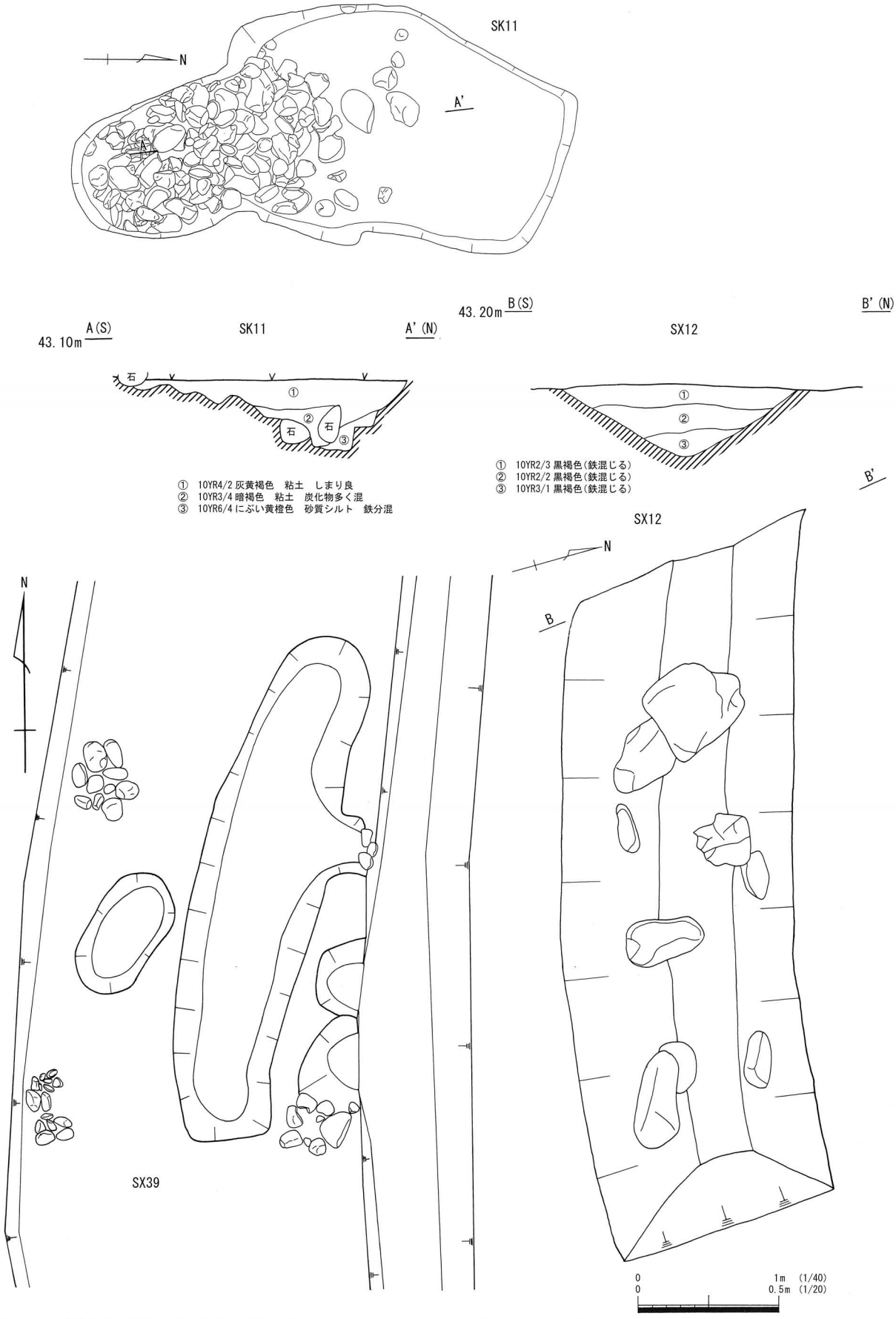


図 10　遺構平面図及び断面図（ＳＫ 11 は S=1/40、他は S=1/20）

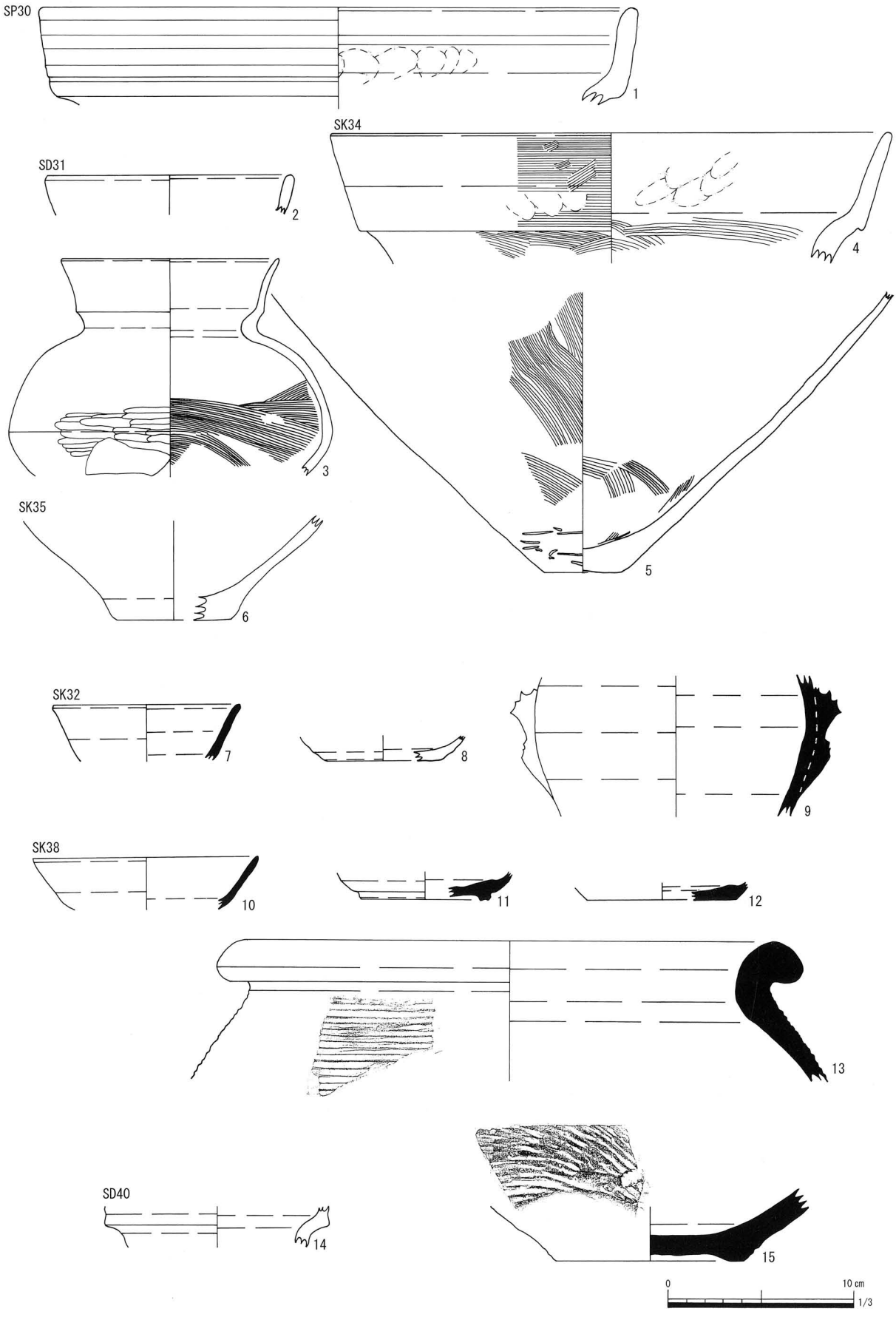


図 11　遺物実測図 (S=1/3)

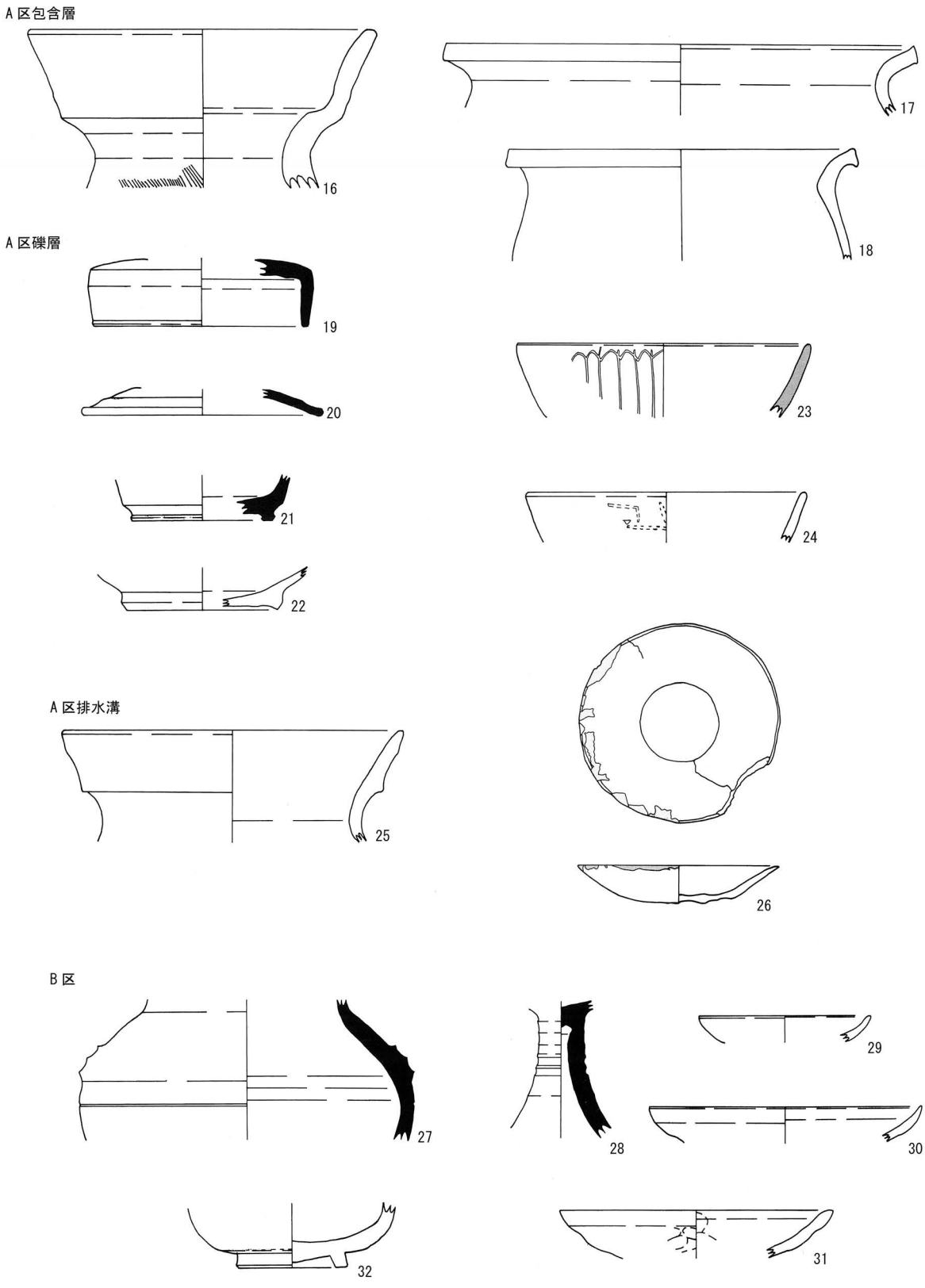


図12　遺物実測図 (S=1/3)

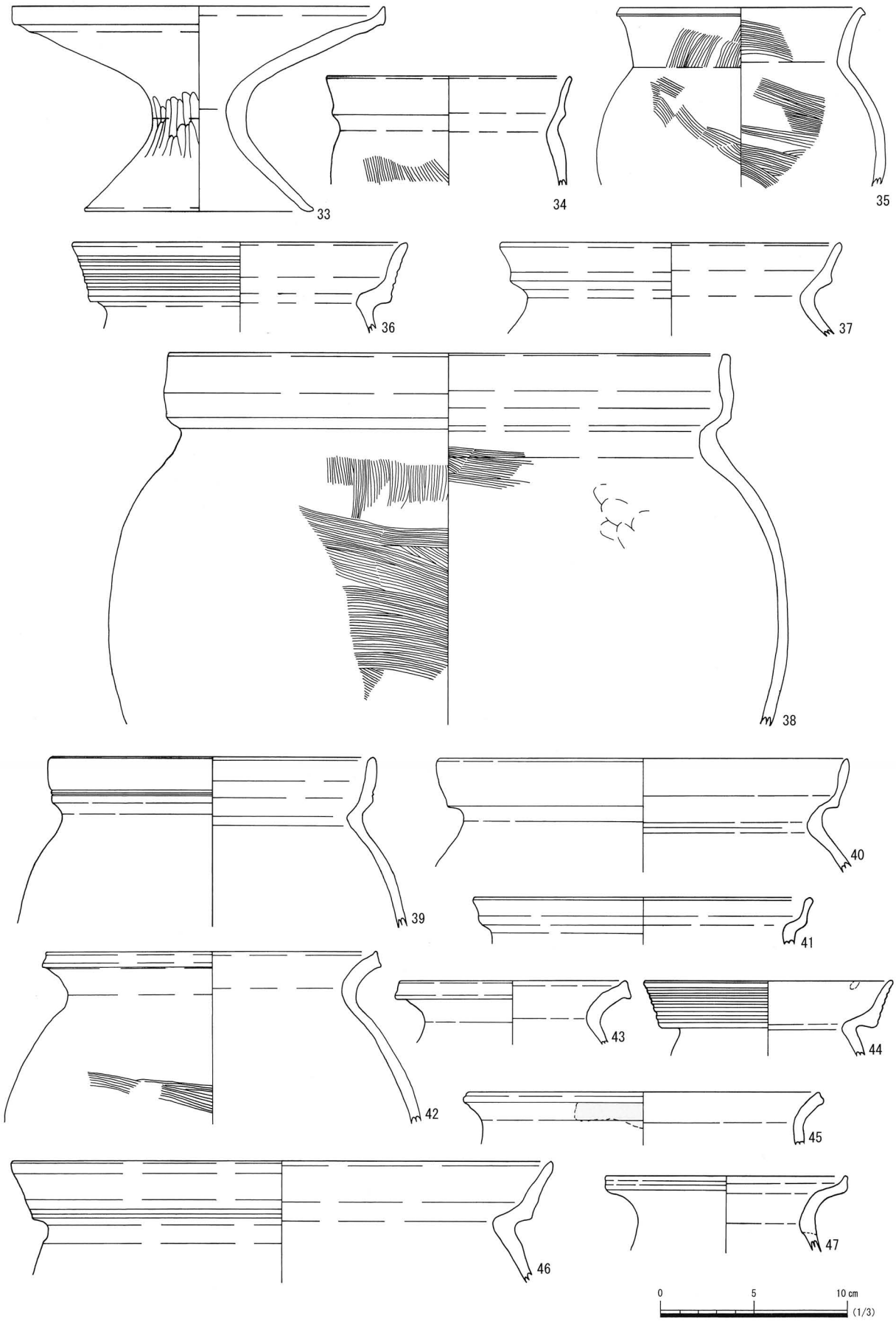


図 13　平成 20 年度 19 トレンチ試掘調査出土遺物実測図 (S=1/3)

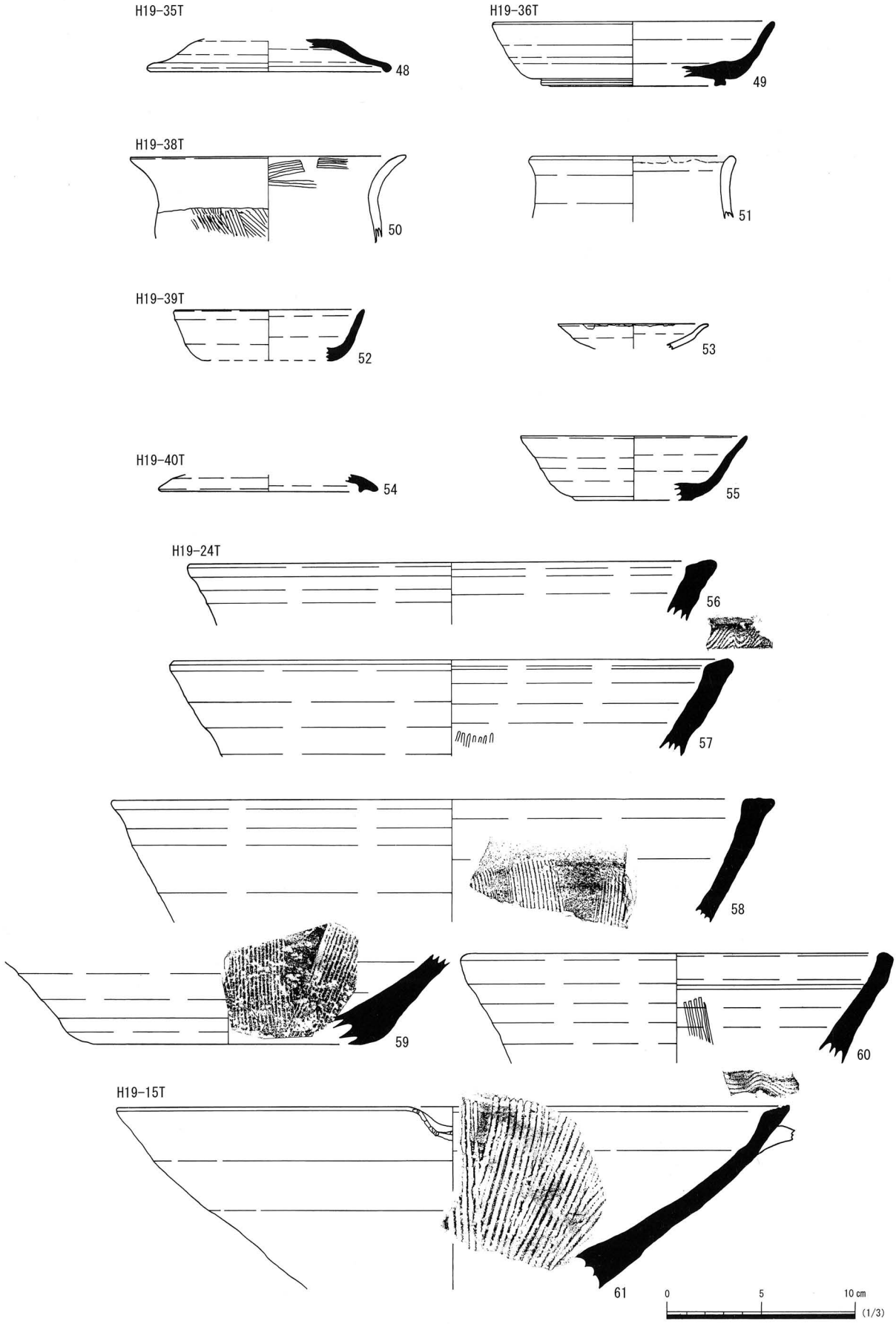


図 14　平成 19 年度試掘調査出土遺物実測図 (S=1/3)

図版1

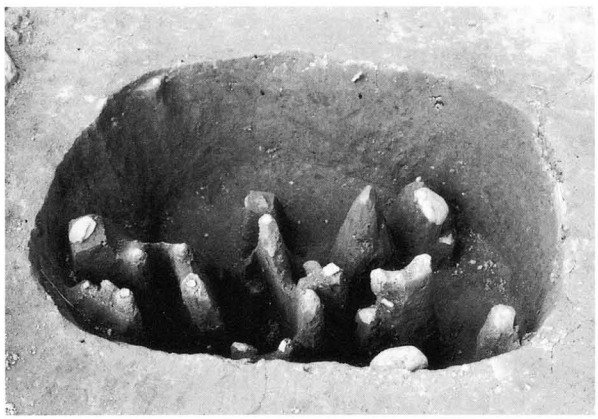
航空写真（1961 年国土地理院撮影）

SD31　出土状況（北から）

SD31　完掘（東から）

SK34　出土状況（西から）

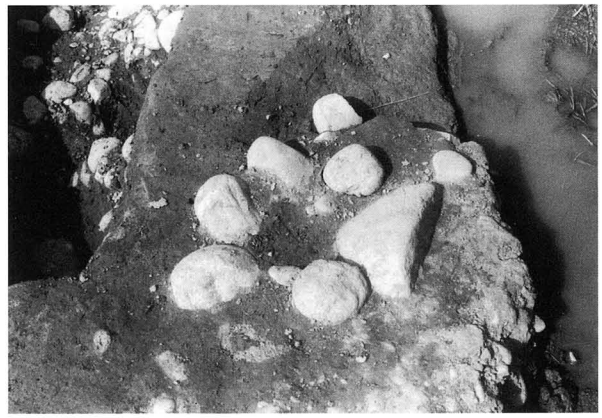
SK34　完掘（東から）



SK32　出土状況（南から）

SX39　検出状況（北から）

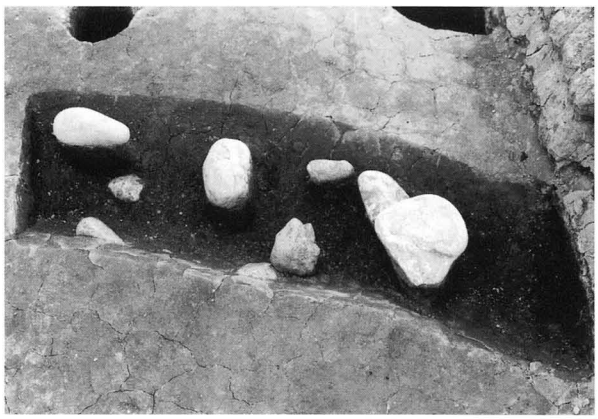
SX39・C 根石検出状況（東から）



SX39・A 根石検出状況（南から）

SK11　礫出土状況（東から）

SK11　完掘（東から）



SX12　完掘（北から）

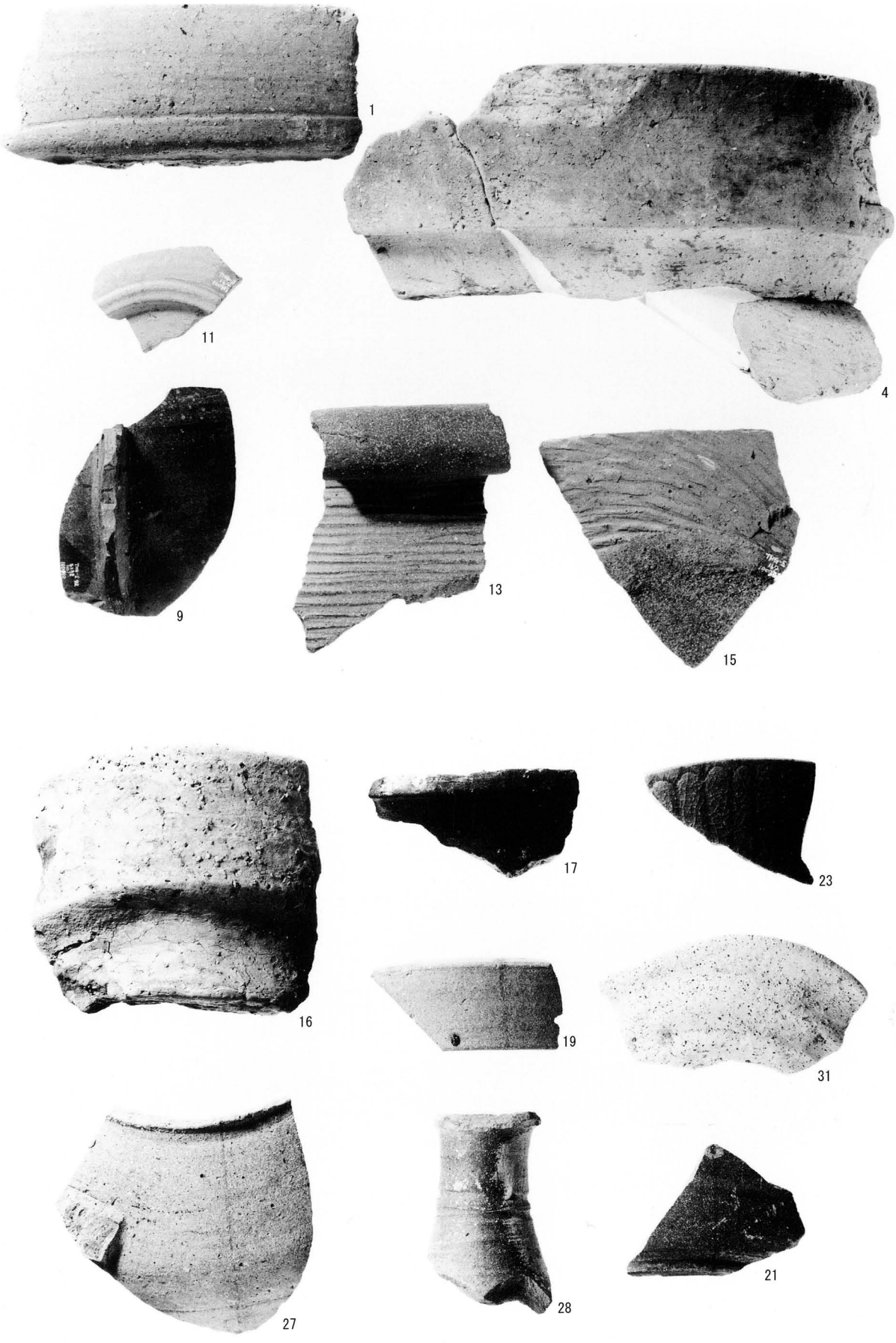
SK01　完掘（南から）

SD08　完掘（東から）

SD09　完掘（東から）

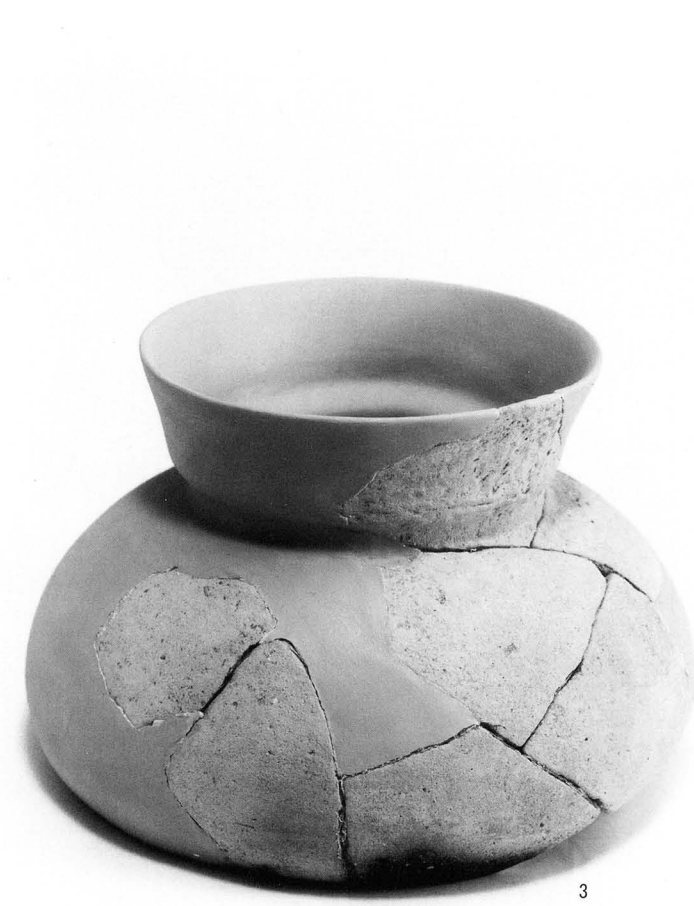
SP21　完掘（南から）

SP18　完掘（南から）



遺物写真

図版5



3

26

平成20年度19トレンチ出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	とやましたちほんごうにいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書 名	富山市舘本郷Ⅱ遺跡発掘調査報告書
副 書 名	経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業） 高善寺地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻 次	(1)
シ リ ー ズ 名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	43
編 著 者 名	細辻嘉門
編 集 機 関	富山市教育委員会　埋蔵文化財センター
編集機関住所	〒930-0091　富山市愛宕町１丁目2-24　　TEL. 076-442-4246
発 行 年 月 日	西暦2011年3月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ′ ° ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
舘本郷Ⅱ 遺跡	富山市八尾町 高善寺地内	16201	361068	36度 36分 41秒	137度 08分 11秒	平成22年8月11日 ～9月30日	331.9	県営ほ場 整備

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特記事項
舘本郷Ⅱ 遺跡	集落	弥生時代終末	溝1、土坑3、ピット3	弥生土器	
		古代	溝1、土坑6	土師器・須恵器	
		中世	建物の根石、溝、土坑、ピット等	珠洲・中世土師器・青磁	
		近世		瀬戸美濃・唐津・伊万里・被熱礫	

要約

弥生～近世まで断続的に営まれた集落の遺構を確認した。

弥生時代の遺構は、溝1・土坑3・ピット3を確認した。被熱した遺構の変色は薄く、遺構の深さも浅いことから、短期間に営まれたキャンプサイトのような性格と考えられる。

今回調査区の弥生土器は祭式土器が出土していない。平成8年度調査区で出土した弥生土器は祭式土器が高い比率を占め、首長クラスの高いレベルに根差す集落端部の祭祀場であると推測されている。今回の調査区は、特殊な性格の遺構周辺に性格を異にする集落が点在していると考えられる。

古代の遺構は、溝1、土坑6を確認した。土坑が多く集落でも居住域ではない端部と考えられる。

近世の建物の根石とみられる遺構ＳＸ39は、根石Ａ－Ｂ間が1.8m、Ｂ－Ｃ間が2.4mである。簡易な建物（作業小屋・倉庫）が考えられる。

今回の調査では青磁なども出土しており、近所の方の田直しの際「埋蔵銭が出た」という話もあることから、近隣に中世～近世の遺構が存在している可能性が高い。

富山市埋蔵文化財調査報告 43

富山市舘本郷（たちほんごう）Ⅱ遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備）
高善寺地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（1）

発 行 日　2011（平成 23）年 3 月 18 日
発行機関　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
〒 930-0091
富山市愛宕町 1 丁目 2-24
ＴＥＬ　０７６-４４２-４２４６
ＦＡＸ　０７６-４４２-５８１０
E-mail：maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印　　刷　株式会社 サカイ印刷